

## 昭森社『左川ちか詩集』(一九三六)の書誌的考察

——伊藤整による編纂態度をめぐって

島田 龍

はじめに

昭和初期に活動した詩人・翻訳家の左川ちか(一九二一〜三六)は、生涯に二〇数篇の翻訳(小説・詩・評論)をなし、現存八八篇の詩を作った。翻訳は一九二九年春から三五年初夏、詩作期間は三〇年夏から三五年夏秋であるから多作とはいえない。ただ、雑誌に再掲するにあたって、改題を含む細かい改稿を繰り返してきた。その結果、夥しいヴァリアント(異稿)が生じている。

三六年一月七日死去。一月二十日に七六篇の詩を収載した『左川ちか詩集』(以降『詩集』と略す)が森谷均を社主とする昭森社から三五〇部(内特製版四五部・書痴版五部)出版された<sup>①</sup>。三岸節子装画。奥付に「編纂兼発行人森谷均」とあるが、実際に編集したのは伊藤整(一九〇五〜六九)である。『詩集』には後述する「左川ちか詩集覚え書―刊行者」との一文があるものの、整の名は明記されていない。しかし、『椎の木』誌上の『詩集』刊行告知文に「編纂者伊藤整」とあること<sup>②</sup>。さらにこれを裏付ける川崎昇や江間章子らの証言によっても明らかである<sup>③</sup>。

同郷の朋友川崎昇の妹であるちか(本名川崎愛)とは、整が小樽高等商業学校時代からの付き合いで、北海道庁立小樽高等女学校生の彼女に兄のように接していた。

稿者はこれまで、一九二〇年代半ば以降の伊藤整と左川ちかの文学的

関係を考察してきた<sup>④</sup>。すなわち、整の第一詩集『雪明りの路』(椎の木社、一九二六年)では、ちかは叙情詩を彩る詩材の一人であった。二七年にちかは女学校を卒業。さらに同校補習科師範部で英語を修める。やがて兄と整に導かれるように、二八年夏に上京。ジェイムズ・ジョイスを始めとするモダニズム文学の翻訳からキャリアを出発し、翻訳を指導した整の綿密なプロデュースのもと詩壇に登場した。二人は親密な関係にあった<sup>⑤</sup>。ちかの詩には、先行する整の作品に対応するものがいくつかあるが、その詩風は大きく異なっている。

一方で『詩集』に関して、これまで十分な検討はなされていない。唯一、八一年六月に「『左川ちか詩集』編集上の問題点」と題した、川崎浩典による中央大学国文学会研究発表の記録がある<sup>⑥</sup>。考察内容の詳細は不明であるが、『詩集』編纂方針を踏まえ詩篇のヴァリアントを比較した、本稿の先駆的研究と思われる。なお川崎はちかの親族にあたる。

川崎と曾根博義、小野夕馥が八三年に編纂した森開社『左川ちか全詩集』には八一篇。同じ森開社の二〇一〇年『左川ちか全詩集新版』には四篇を追加し八五篇を収録、掲載誌の調査が進展した。いずれも『詩集』を底本としてその配列順に詩を並べ、次に新出詩篇を巻末に揃えている。近年刊行された紫門あさを編『新編左川ちか詩集前奏曲』(東都我刊我書房、二〇一七年)は、雑誌初出版の詩形に揃えるという独自の編集が施されたが、配列自体は『詩集』及び森開社版に準拠している。

もとよりそれは編者の自由であるが、結局『詩集』がどのような編集基準で編集されたのか、その編集に問題点はないのかといった書誌的な研究検討がほぼ加えられてこなかったのも事実である。その結果、『詩集』が無条件に正典化され、考察の対象として引用されてきた。しかし、詩はわずか一文字の助詞が改稿されただけで、その解釈が大きく異なってくる。今回の調査で明らかになったように、未収録詩と雑誌版のヴァリエントを合わせると、現在確認できる八八篇の詩篇におよそ一九〇種類を数え、個々の関係を丁寧に検証する必要がある。まして『詩集』は遺稿詩集である。詩人本人の意思と編者独自の関与の度合いを踏まえ、厳しく史料批判することが諸研究の前提になると考える。

本稿ではかかる状況を鑑み、詩篇の初出から再掲、『詩集』収録時に至る校異を通じ、『詩集』の特徴と編者の関与を考察し、改稿が少なくない詩の特色を考える手掛かりとしたい。左川ちかの詩を『詩集』という伊藤整の眼差しから解放する一歩ともなるであろう。

なお、引用した詩篇史資料の漢字は原則として現行字体に改めた。

### 一、左川ちかの詩篇一覧

まず、現在判明しているちかの詩作品を、稿者が新たに発見確認した「硝子の道」を含め、暫定的に整理した結果、八八詩篇と数えた。以下、詩篇一覧を掲げる。

#### 凡例

一、各詩篇の初出雑誌の年月日順に、「」内に作品番号を1から88まで付した。

一、各詩篇の題名に続き、初出雑誌名・号数・発行日を記し、さらに

再掲誌、再々掲誌の書誌を付した。

一、初出雑誌発行日が同じ詩篇は、同一雑誌内の掲載順に配列した。

一、初出雑誌発行日が同じ別雑誌同士の詩篇は、雑誌冒頭詩篇題名の五十音順にしたがい配列した。

一、雑誌・書籍発行日は、例えば一九三〇年一月一日の場合、19300101と略した。

一、昭森社『左川ちか詩集』を『詩集』と略した。

一、再掲誌、または『左川ちか詩集』で改題された詩篇は、改題名を付した。

一、改題された上に、初出詩篇から大きく改作されたと判断できる詩篇には、「改題改作」と注記し、これを独立した詩篇として作品番号を付した。

一、『左川ちか詩集』に掲載されていない詩篇は、「詩集」未収録」と記した。

#### 【一九三〇年 五篇】

【1】「青い馬」『白紙』10 (19300801)、『越佐詩歌集』(19301230)『詩と詩論』12 (19310616)

【2】「昆虫」『ヴァリエテ』1 (19300801)

【3】「秋の写真」『白紙』11 (19301001)、『詩集』改題「私の写真」

【4】「朝の麵麴」『文芸レビュー』2—9 (19301001)、『詩と詩論』12 (改題「朝のパン」19310616)、『詩抄』1 (19330318)

【5】「墜ちる海」『レスブリ・ヌウボオ』4 (19301201)『詩集』未収録

#### 【一九三二年 一篇】

【6】「出発」『今日の詩』3 (19310201)、『詩と詩論』12 (19310616)

- [7] 「黒い空気」『今日の詩』 5 (19310401)、『詩と詩論』 12 (19310616)
- [8] 「錆びたナイフ」『白紙』 13 (19310410)、『詩と詩論』 12 (19310616)
- [9] 「雪が降る」『新形式』 2 (19310505)、『詩と詩論』 12 (改題「雪が降つてゐる」19310616)
- [10] 「緑の焔」『新形式』 3 (19310605)、『詩と詩論』 14 (19311217)
- [11] 「朝」『白紙』 14 (19310705)、『詩と詩論』 14 (改題「青い球体」19311217)
- [12] 「緑色の透視」『レスプリ・ヌボオ』 2—2 (19310705)
- [13] 「死の髯」『今日の詩』 10 (19310901)、『文学』 1 (改題改作「幻の家」19320318)
- [14] 「断頭機」『今日の文学』 1—9 (19310901)、『詩と詩論』 14 (改題「断片」19311217)
- [15] 「ガラスの翼」『今日の文学』 1—10 (19311001)、『詩と詩論』 14 (19311217)
- [16] 「季節のモノクル」『白紙』 15 (19311101)、『詩と詩論』 14 (19311217)
- 【一九三二年 二二篇】
- [17] 「循環路」『椎の木』 1—1 (19320101)、『文学』 1 (19320318)
- [18] 合作詩「冬の詩」『若草』 8—2 (19320201) 竹中郁、北園克衛、春山行夫、澤木隆子、杉田千代乃、左川ちか
- [19] 「青い道」『反響』 4 (19320205)、『文学』 1 (19320318)
- [20] 「記憶の海」『文学』 1 (19320318)、『詩抄』 1 (19330318)
- [21] 「幻の家」『文学』 1 (19320318) 「死の髯」の改題改作
- [22] 「冬の肖像」『椎の木』 1—4 (19320401)
- [23] 「硝子の道」『関西文芸』 8—5 (19320501) 『詩集』 未収録
- [24] 「白と黒」『マダム・ブランシユ』 1 (19320515)、『文学』 4 (改題改作「睡眠期」19321216)
- [25] 「風」『海盤車』 1—3 (19320601)、『文学』 4 (19321216)
- [26] 「蛋白石」『椎の木』 1—6 (19320601)、『文学』 4 (19321216)、『詩抄』 1 (19330318)
- [27] 「神秘」『椎の木』 1—6 (19320601)、『文学』 4 (改題改作「睡眠期」19321216)、『詩抄』 1 (19330318)
- [28] 「夢」『マダム・ブランシユ』 2 (19320701)、『文学』 4 (改題改作「睡眠期」19321216)
- [29] 「樹魂」『反響』 17 (19320715) 『詩集』 未収録
- [30] 「白く」『海盤車』 1—4 (19320810)、『文学』 4 (19321216)
- [31] 「The street fair」『椎の木』 1—10 (19321001)、『行動』 1—3 (19321201)
- [32] 「緑」『文芸汎論』 2—10 (19321001)
- [33] 「The madhouse」『文芸汎論』 2—10 (19321001)、『文学』 4 (改題改作「睡眠期」19321216)
- [34] 「雲のかたち」『マダム・ブランシユ』 3 (19321101)、『文学』 4 (19321216)、『詩抄』 1 (19330318)
- [35] 「眠つてゐる」『文芸汎論』 2—12 (19321201)、『文学』 4 (改題改作「睡眠期」19321216)、『詩抄』 1 (19330318) 「眠つてゐる」
- [36] 「雪の日」『文芸汎論』 2—12 (19321201)
- [37] 「鐘のなる日」『海盤車』 1—6 (19321205)、『マダム・ブランシユ』 4 (改題「冬の詩」19330110)
- [38] 「睡眠期」『文学』 4 (19321216) 「眠つてゐる」「神秘」「白と黒」「夢」『The madhouse』の改題改作 『詩集』 未収録
- 【一九三三年 一八篇】
- [39] 「憑かれた街」『椎の木』 2—1 (19330101)、『詩法』 1 (「憑れた街」

- 19340801)
- [40] 「波」『椎の木』2—1 (19330101)
- [41] 「雲のやうに」『椎の木』2—1 (19330101)、『行動』1—3 (19331201)
- [42] 「毎年土をかぶらせてね」『今日の文学』3—1 (『冬の詩』19330101の改題)
- [43] 「目覚めるために」『マダム・ブランシユ』5 (19330225)
- [44] 「花咲ける大空に」『マダム・ブランシユ』6 (19330415)、『詩法』1 (19340801)
- [45] 「雪の門」『海盤車』2—8 (19330415)、『行動』1—3 (19331201)
- [46] 「単純なる風景」『椎の木』2—5 (19330501)、『詩法』1 (改題「POEM」19340801)
- [47] 「春」『椎の木』2—5 (19330501)、『マダム・ブランシユ』7 (19330625)、『詩法』1 (19340801)
- [48] 「舞踏場」『貝殻』2—2 (19330501)
- [49] 「五月のリボン」『今日の文学』3—6 (19330601)
- [50] 「むかしの花」『新人早稲田』1—4 (19330620)、『椎の木』2—9 (19330901)
- [51] 「暗い夏」『作家』1 (19330701)
- [52] 「星宿」『椎の木』2—8 (19330801)、『女人詩』11 (19330810)、『詩法』1 (19340801)
- [53] 「他の一つのもの」『椎の木』2—8 (19330801)、『呼鈴』12 (19331001)、『行動』1—3 (19331201)
- [54] 「背部」『海盤車』2—11 (19331005)、『測量船』2 (19331101)
- [55] 「葡萄の汚点」『椎の木』2—11 (19331101)
- [56] 「雪線」『文芸汎論』3—12 (19331201)

- 「一九三四年 一九篇」
- [57] 「プロムナード」『鬪鶏』3 (19340220)
- [58] 「遅いあつまり」『貝殻』3—1 (19340301)、『苑』2 (19340401)
- [59] 「天に昇る」『カイエ』6 (19340305)、『チルソグチョ』1 (19340601)
- [60] 「会話」『マダム・ブランシユ』14 (19340310)、『苑』2 (19340401)
- [61] 「メーフラワー」『カイエ』7 (19340510)、『小劇場』3—7 (19340625)
- [62] 「果実の午後」『椎の木』3—6 (19340601)、『日本詩壇』2—5 (改題「おなご」19340701)
- [63] 「暗い唄」『日本詩壇』2—5 (19340701) (『詩集』「暗い歌」)
- [64] 「花」『カイエ』8 (19340701)
- [65] 「午後」初出誌不明。『書帷』193407—09か
- [66] 「夏のをはり」『女人詩』4—14 (19340830)、『レスプリ・ヌウボオ』1 (19341101)、『モダン日本』5—11 (改題「季節」19341101)
- [67] 「海泡石」『椎の木』3—9 (19340901)
- [68] 「指間の花」『呼鈴』20 (19340910)、『詩集』未収録
- [69] 「1.2.3.4.5」初出誌不明。「指間の花」の改題改作
- [70] 「Finale」『椎の木』3—10 (19341001)
- [71] 「前奏曲」『カイエ』9 (19341101)
- [72] 「素朴な月夜」『椎の木』3—11 (19341101)
- [73] 「言葉」『椎の木』3—12 (19341201)
- [74] 「董の墓」『文芸汎論』4—12 (19341201)、『詩集』未収録
- [75] 「落魄」『海盤車』3—16 (19341201)
- 「一九三五年 一篇」
- [76] 「烽火」『輝ク』3—1 (19350117)、『詩集』未収録
- [77] 「三原色の作文」『海盤車』4—17 (19350210)

- [78] 「太陽の娘」『るねっさんす』2 (「太陽の唄」19350301)、『詩法』12 (19350801)
- [79] 「夜の散歩」『樵の木』4—2 (19350301) 『詩集』未収録
- [80] 「花苑の戯れ」『海盤車』4—18 (19350410) 『詩集』未収録
- [81] 「海の花嫁」『セルパン』52 (19350601)
- [82] 「山に話してゐる」『芸術科』3—7 (19350701)、『樵の木』5—3 (改題「夏のこゑ」19360301)
- [83] 「海の捨子」『詩法』12 (19350801)、『短歌研究』4—8 (「海の天使」19350801) 『詩集』未収録
- [84] 「風が吹いてゐる」『詩法』12 (19350801) 『詩集』未収録
- [85] 「山脈」『短歌研究』4—8 (19350801)
- [86] 「海の天使」『短歌研究』4—8 (19350801) 「海の捨子」の改題改作

## 一九三六年 二篇

- [87] 「季節」『海盤車』5—20 (19360101) 『詩集』未収録。「夏のをほり」改題の「季節」(19341101)とは別の詩
- [88] 「季節の夜」『樵の木』5—3 (19360301)
- 『詩集』未収録詩篇は、[5]「墜ちる海」、[18]「合作詩「冬の詩」、[29]「樹魂」、[23]「硝子の道」、[38]「睡眠期」、[68]「指間の花」、[74]「葦の墓」、[76]「烽火」、[79]「夜の散歩」、[80]「花苑の戯れ」、[83]「海の捨子」、[84]「風が吹いてゐる」、[87]「季節」の一三篇で詩作の後半期に集中する。

改題詩は多数あるが、形式または内容的に大きな変化が認められると判断したものは、独立した改題詩として別々に数えた。[13]「死の髯」の改題詩[21]「幻の家」、[68]「指間の花」の改題詩[69]「1.2.3.4.5」

- [83] 「海の捨子」の改題詩[86]「海の天使」、[35]「眠つてゐる」[27]「神秘」[24]「白と黒」[28]「夢」[33]「The madhouse」の五篇を繋げた改題詩[38]「睡眠期」である。
- 『詩集』がともに収載する[66]「夏のをほり」と「季節」([87]「季節」とは別の詩)は、同一作品のヴァリアントとみなし、後者に作品番号は付していない。

## 二、『左川ちか詩集』の経緯と「覚書」

左川ちかの個人詩集は生前に企画構想がすであつた。三四年四月に第三次『樵の木』に近刊予告が掲載されている。百田宗治による「左川ちかの死」『詩集のあとへ』(ともに一九三六)などによると、この時点では百田を編者とし樵の木社から刊行するための準備が開始されたようだ。百田の都合のせい、近刊予告から一年半が経過しても編集・刊行作業は進展せず、告知が先行していた状況と思われる。入院を知った百田は「早く快くなれ、そして詩集を出さう」と手紙を出し、いずれ「校正刷でも彼女の病床に間に合せてやりたい」と願つた<sup>8)</sup>。しかし病状の進行は予想以上に早かつた。

三五年十月九日に入院したちかは末期症状の胃癌と診断、一月中旬から衰弱が目立つようになり、一二月には昏睡状態に陥り、翌年一月七日に息を引き取つた。三月発行の『樵の木』掲載の病床日記(一〇月一六日～一一月二日)に『詩集』の記述はない。詩友・関係者の証言・回想文を見る限り、百田本人との面会も確認できず、具体的な作業が開始進展した形跡はない。入稿以前の詩稿整理のままであつたと思われる。この整理稿は現存を確認できず、どの程度の分量であつたかも判然としない。結局生前の詩集刊行は実現することなく、「詩集のことを頼んで死んだ」

という本人の遺志で改めて編纂を託されたのが、伊藤整であったようだ。<sup>⑥</sup>

『権の木』三六年二月号には「編纂者伊藤整」と明記され、権の木社からの『詩集』近刊予告が再開された。その後、版元が昭森社に変わった理由は不明であるが、同社は三五年の創業当初からモダンリズム詩集を刊行している。

以上の経緯を踏まえると、『詩集』の内容や構成に本人による積極的な校勘がなされているとは想定し難い。

『詩集』巻末には、川崎昇による略年譜「左川ちか小伝」、<sup>⑦</sup>百田宗治の追悼文「詩集のあとへ」とともに、「左川ちか詩集覚え書―刊行者―」（以降「覚え書」と略す）が収められている。これは無署名であるが、先の経緯から伊藤整による文章と思われる。全文を引用する。

一、この詩集の編輯は発表順によつた。但し再度雑誌を更へて発表されたものはその最初の発表の時に順つた。

一、詩の改作されたものはその改作のものによつた。

一、題名の改められたものはその改題名によつた。但し「幻の家」は「死の髻」の改作ではあるが、思ふところあつて二者とも収載した。その他の改題は左の通りである。

朝のパン（朝の麵麴改題）

眠つてゐる（睡眠期1改題）

神秘（同2改題）

白と黒（同3改題）

夢（同4改題）

The mad House（同5改題）

毎年土をかぶらせてね（冬の詩改題）

一、この詩集の詩は「昆虫」を昭和五年八月号の「ヴェリエテ」誌に

発表したに始まり「夏のこゑ」と「季節の夜」の昭和十一年三月号の「権の木」誌への発表を最後とする。「The street fair」と「1.2.3.4.5.」との二篇は制作若しくは発表の時を明らかにしない。

一、詩を発表した雑誌は左の通りである。

詩と詩論、権の木、短歌研究、文学、文芸汎論、セルパン、今日の詩、今日の文学、マダムブランシユ、海盤車、貝殻、カイエ、作家、女人詩、呼鈴、鬪鶏、書帷、モダン日本、るねつさんす、エスプリヌーヴォー、白紙、ヴェリエテ、文芸レビュー、新形式。

『詩集』の編集方針を明らかにした「覚え書」の内容は次のように整理できよう。

①『詩集』の配列は初出誌の発表（発行）順にしたがう。

②改稿された場合、初出稿（初出版）ではなく改稿（再掲載）を掲載。

③改題された場合、「朝のパン」と「毎年土をかぶらせてね」のように原則、改題版を掲載。ただし「死の髻」と「幻の家」は編者の判断で両方収録。改題詩「睡眠期」1〜5章も原則と異なり、それぞれ初出詩の題名と形式で収録。

④デビュー作「昆虫」と遺作二篇「夏のこゑ」「季節の夜」の書誌、初出不明二篇「The street fair」「1.2.3.4.5.」の注記。

⑤『詩と詩論』以下の発表誌の注記。二四誌。

### 三、「覚書」①⑤の原則と編集実態の揺れ

～掲載・未掲載誌をめぐる

巻末の校異でも想定されるように、整が『詩集』を編むにあたり、「覚書」の原則に則って手元に用意した複数の雑誌版を取捨選択し、仮名遣い・句読点・疊字・改行の処理など、その全てが編者の判断かはともかく、細かい修正が加えられている。ただ仮名遣いなどの処理や基準は詩篇によって一定していない。一部には編集部や植字工の判断が含まれるだろう。本章ではまず、左川ちかの詩掲載誌と『詩集』との関係について検討したい。

『詩集』「覚書」⑤掲載誌は二四誌。現在確認が難しい詩誌も含まれ、とくに『書帷』は詳細不明だ。ちかの詩友であった内田忠が故郷福井県丸岡町で発刊していた詩誌であろう。一号(三四年一月)・二号(三四年二月)の目次が判明している。ちかの詩篇で唯一掲載誌不明の「65」「午後」が三号以降に掲載されている可能性がある。『詩集』で「午後」は、「64」「花」(『カイエ』八、三四年七月)と「67」「海泡石」(『椎の木』三一九、三四年九月)に挟まれていることから、初出誌発行順に配列する「覚書」①の原則にしたがえば、三四年七月～九月掲載と絞り込める。今後の調査進展が期待されよう。

「覚書」⑤未掲載誌は、現在判明する限り、『反響』(「19」「青い道」三二・二二)、『関西文芸』(「23」「硝子の道」三二・五)、『新人早稲田』(「50」「むかしの花」三三・六)、『測量船』(「54」「背部」三三・一一)、『行動』(「31」「The street fair」45)、『雪の門』(「53」「他の一つのもの」41)、『雲のやうに』(全三三・一二)、『苑』(「60」「会話」58)、『遅いあつまり』(全三三・四)、『ごろつちよ』(「59」「天に昇る」三四・六)、『小劇場』(「61」「メーフラワー」三四・六)、『日本詩壇』(「63」「暗い唄」62)、『おなじく』

全三三・七)、『輝夕』(「76」「烽火」三五・一)、『芸術科』(「82」「山に話してゐる」三五・七)、『詩法』(「46」「POEM」44)、『花咲ける大空に』(「52」「星宿」47)、『春』(「39」「憑かれた街」以上三四・八)、『83」「海の捨子」84)、『風が吹いてゐる』(「78」「太陽の唄」以上三五・八)の一二雑誌二四篇となる。事実、校異においてもこれらの雑誌掲載版の詩篇を参照した形跡は認められなかった。

加えて「覚書」⑤記載誌の掲載詩篇においても、編者が落としたヴァリアントの存在を推認できる。これは『詩集』の詩篇配列からもある程度傍証できる。ある詩篇が初出版、再掲載と分かれる場合、「覚書」②の原則通り再掲載を底本とするものの、「覚書」①に反し配列の順番が狂ったケースが散見される。初出版の存在を見落としたことが原因であると思われる。

例えば『詩集』序盤、「7」「黒い空気」(初出『今日の詩』五、三二年四月)、「9」「雪が降つてゐる」(初出『新形式』二、三一年五月)、「10」「緑の焰」(初出『新形式』三、三一年六月)と、初出誌の発表年月順にしたがい正しく配列されているが、次に「6」「出発」(初出『今日の詩』三、三二年二月/再掲『詩と詩論』一二、三二年六月)、「1」「青い馬」(初出『白紙』一〇、三〇年八月/再掲『詩と詩論』一二、三二年六月)と続いている。「出発」「青い馬」いずれも、編者が初出誌『今日の詩』『白紙』を見落とした結果、三一年六月の再掲誌『詩と詩論』を配列の典拠とした編集実態が推定できよう。

他にも「11」「青い球体」(初出『白紙』一四、三二年七月)、「14」「断片」(初出『今日の文学』一九、三一年九月)、「15」「ガラスの翼」(初出『今日の文学』一〇、三二年一月)、「33」「The mad house」(初出『芸芸汎論』二一〇、三二年一月)、「34」「雲のかたち」(初出『マダム・ブランシュ』三、三二年一月)、「5」「風」(初出『海盤車』一三、三二年六月)

などが、初出誌を見落とし配列が狂った事例と思われる。

逆に配列は正しいが、再掲版が『詩集』に反映していない[37]「鐘のなる日」(初出『海盤車』一六、三二年二月、再掲『マダム・ブランシュ』四、三三年一月)などは、『マダム・ブランシュ』を落としたものである。

また[31]「The street fair」は、初出誌が「覚書」⑤記載の『椎の木』(二一〇、三二年一〇月)であるにも関わらず、「制作若しくは発表の時間を明らかにしない」と、「覚書」④の初出不明詩に数えられていることから、編者が『椎の木』該当号を見落とししたことがわかる。

以上、『今日の詩』『白紙』『今日の文学』『文芸汎論』『マダム・ブランシュ』『海盤車』『椎の木』の七誌一〇篇。たまたま現物を手元に備えていなかったか、過失で見落とししたかは不明だが、先の「覚書」⑤未記載誌の一二雑誌二四篇と合計すれば決して少なくはない。

次に「覚書」⑤未掲載誌の発行時期に注意すると、三二年二月の『反響』に始まり、同年五月『関西文芸』を経て、『新人早稲田』『測量船』『行動』と三三年が三冊、三四年が『苑』『ごろつちよ』『小劇場』『日本詩壇』の四冊、三五年が『輝ク』『芸術科』『詩法』の三冊である。三〇年夏から三五年夏までのちかの詩作期間において、中後半期に偏在していることがわかる。

二人の個人的交流は、ちかの晩年まで継続するものの、その文学的営為に整が積極的に関与したのは二九年春から三二年夏頃までと思われる<sup>13</sup>。すなわち『文芸レビュー』『新文学研究』など整編集の雑誌で、オルダス・ハクスリー、ヴァージニア・ウルフなどモダニズム文学の小品をちかが訳し、ジェイムズ・ジョイスの「室楽」を『詩と詩論』『椎の木』などで翻訳連載、三二年八月に単行本化した時期である。このとき、ちかは整の自宅で各種の翻訳指導を受け、「室楽」の校訂を受けた。

三二年五月にちかは、新たな盟友となる北園克衛らモダニズム詩人が集うアルクイユのクラブに拠り、機関誌『マダム・ブランシュ』創刊号に巻頭詩「白と黒」を飾る。同時期の『室楽』刊行後は翻訳を中断、創作詩に集中しており、整の直接的関与の痕跡がなくなっていく。

『詩集』未掲載誌に話を戻すと、三二年半ば以降の諸雑誌を整が見落としした背景として、そのような二人の文学関係の変化を重ね合わせられよう。女性誌『ごろつちよ』『輝ク』、地方誌『関西文芸』『小劇場』などはとくに目に留まりにくかったかもしれない。

ただ、なぜ未掲載誌となったか疑問の雑誌もある。例えば『芸術科』。川端康成の後任として、日本大学芸術科で三四年四月から整が講師を務めていた縁で、ちかに発表の場を紹介したと推測される。とはいえ、単なる過失の可能性はあるだろう。他には、整自身も度々寄稿していた『行動』『苑』『詩法』が抜け落ちているのも不審である。

例えば『詩法』を確認してみよう。『詩と詩論』系の旧知のモダニズム詩人が集った『詩法』とちかとの関係は深く、一号に詩五篇、四号に随筆一篇、一二号に詩三篇を寄せている。『詩法』掲載詩と『詩集』収録詩の関係は次の通りである。

『詩法』一号(三四・八)

[39]「憑かれた街」↓『詩集』は初出『椎の木』版に拠る

[44]「花咲ける大空に」↓『詩集』は初出『マダム・ブランシュ』

版に拠る

[46]「POEM」↓『詩集』は初出『椎の木』版(題「単純なる風

景」)に拠る

[47]「春」↓『詩集』は初出『椎の木』版に拠る

[52]「星宿」↓『詩集』は再掲『女人詩』版(『詩法』版は再々掲

に拠る

伊藤整「人間のある詩論」掲載

『詩法』四号(三四・一一)

左川ちか「私の夜」(随筆)掲載

伊藤整「路次ぐらし」『詩作法』女艸会洋画展」掲載

『詩法』一二号(三五・八)

「83」「海の捨子」↓『詩集』未収録。『詩集』は改題改作詩「海の

天使」(『短歌研究』)掲載

「84」「風が吹いてゐる」↓『詩集』未収録

「78」「太陽の娘」↓『詩集』は初出『るねっさんす』版(題「太陽の唄」)に拠る

伊藤整「『詩の周囲』阪本越郎詩論集」掲載

「海の捨子」と同じ一二号に、整は阪本越郎の書評を寄稿する。ちかの掲載号には常に寄稿し、整は『詩と詩論』以来の『詩法』主要メンバーの一人である。ちかの作品を知らなかったとは考えにくい。にも関わらず、「風が吹いてゐる」も『詩集』に収録されず、他誌版を参看したであろう「憑かれた街」「花咲ける大空に」「POEM(単純なる風景)」、「春」「星宿」「太陽の娘(太陽の唄)」といった詩篇においても、再掲版を採用する「覚書」②の原則に反し、『詩法』版が反映された形跡が校異になり。

『詩法』掲載詩のうち、「83」「海の捨子」は、詩人時代の整の代表詩「海の捨子」(『信天翁』一、二八年一月)に应答する、編者にとっても因縁の詩篇である。この作品が『詩集』に掲載されなかったのは意図的なものではないかとの憶測も呼んできた。実際には「海の捨子」のみならず、「風が吹いてゐる」など他の詩篇も落とし、『詩法』そのものを参看した

形跡がないことから、より慎重な検討が求められよう。この問題については、「海の捨子」に代わって改題改作詩「海の天使」が『詩集』に採録されたことも含め、三六年における左川ちかの死と伊藤整文学の軌跡という文脈で、別稿をもって検討する<sup>16)</sup>。

いずれにせよ、詩人の全発表誌のおよそ三分の一もの一二雑誌が欠落、とくに詩作晩年の詩風と改稿のあり方が窺われる八篇もの詩を掲載する『詩法』を全て落としている点は、詩人の最後の文学表現が『詩集』には十分に反映されていないと見なさざるを得ない。

#### 四、「覚書」②の原則と編集実態の揺れ／改稿の扱いをめぐって

本章では、直近の再掲版を採用するという「覚書」②の原則がどの程度貫徹されているかを、校異を踏まえ検討したい。結論からいえば、改稿詩である再掲版を編集から落としたケースが少なくない。

それは主に『詩集』中盤以降から確認できる。『詩集』掲載順に、「37」「鐘のなる日」(再掲『マダム・ブランシユ』四、三三年一月)、「39」「憑かれた街」(再掲『詩法』一、三四年八月)、「41」「雲のやうに」(再掲『行動』一―三、三三年十二月)、「44」「花咲ける大空に」(再掲『詩法』一、三四年八月)、「46」「単純なる風景」(再掲『詩法』一、三四年八月)、「47」「春」(再掲『詩法』一、三四年八月)、「54」「背部」(再掲『測量船』二、三三年一月)、「60」「会話」(再掲『苑』二、三四年四月)、「58」「遅いあつまり」(再掲『苑』二、三四年四月)、「59」「天に昇る」(再掲『ころつちよ』一、三四年六月)、「61」「メーフラワー」(再掲『小劇場』三―七、三四年六月)、「78」「太陽の唄」(再掲『詩法』一二、三五年八月)の一二篇である。直近のヴァリアントに拠らず、初出版にほぼ拠ったこれらの詩篇を仮に**A群**と分類

する。

次に再掲版のみならず再々掲版を持つ詩篇が二篇ある。「53」「他の一つのもの」(再掲『呼鈴』一二、三三年一〇月/再々掲『行動』一一三、三三年一二月)、「52」「星宿」(再掲『女人詩』一一、三三年八月/再々掲『詩法』一、三四年八月)である。いずれも『詩集』では、再掲版に拠るが、最新の再々掲版が反映されていないため、これもA群に分類する。便宜上、雑誌で二度掲載された十二篇をA群d(ダブルの意)、三度掲載された二篇をA群t(トリプルの意)と細区分しておく。

A群では、『マダム・ブランシユ』以外の「覚書」⑤の未記載誌(『詩法』『行動』『測量船』『苑』『ころつちよ』『小劇場』)を集中して落としたことが校異からわかる。

これらA群の詩篇に対し、「覚書」②の原則にしたがい、直近のヴァリアントである再掲版にほぼ拠った詩篇をB群と分類する。もちろん最も数が多い。『詩集』掲載順に作品番号・詩篇名・再掲誌名のみを以下記す。

「7」「黒い空気」、「9」「雪が降つてゐる」、「6」「出発」、「1」「青い馬」、「16」「季節のモノクル」、「11」「青い球体」、「14」「断片」、「15」「ガラスの翼」。以上八篇がほぼ再掲誌『詩と詩論』に拠っている。

次に「17」「循環路」、「19」「青い道」、「24」「白と黒」、「27」「神秘」、「26」「蛋白石」、「28」「夢」、「30」「白く」、「33」「The mad house」、「34」「雲のかたち」、「25」「風」。以上一〇篇がほぼ再掲誌『文学』に拠っている。

さらに「66」「夏のをはり」(再掲『レスプリ・ヌウボオ』)、「82」「夏のこと」(再掲『椎の木』)が続き、合計二〇篇である。『詩と詩論』とその後継誌『文学』を中心に揃えていたことがわかる。

以上のように改稿の扱いにおいて、「覚書」の原則を十分に貫徹でき

ず、初出版に拠ったA群一四篇。原則通り直近の再掲版に拠ったB群二〇篇が『詩集』に混在していることが明らかになった。

## 五、仮説としての左川ちか整理稿

『詩集』七六篇中、雑誌発表が初出誌一回のみの作品(本稿では便宜的にシングル作品と称す)は三〇篇余存在する。発表順に作品番号と題名を記すと次の通りである。一九三〇年詩篇が「2」「昆虫」、「3」「私の写真」。三一年は「12」「緑色の透視」、「13」「死の髻」。三二年は「21」「幻の家」、「20」「記憶の海」、「22」「冬の肖像」、「32」「緑」、「36」「雪の日」。三三年は「40」「波」、「42」「毎年土をかぶらせてね」、「43」「目覚めるために」、「48」「舞踏場」、「49」「五月のリボン」、「51」「暗い夏」、「55」「葡萄の汚点」、「56」「雪線」。三四年は「57」「プロムナード」、「63」「暗い歌」、「64」「花」、「65」「午後」、「67」「海泡石」、「70」「Finale」、「72」「素朴な月夜」、「71」「前奏曲」、「73」「言葉」、「75」「落魄」。三五年は「77」「三原色の作文」、「81」「海の花嫁」、「85」「山脈」、「86」「海の天使」。三六年は「88」「季節の夜」。改稿に至らなかった詩篇が後半期に集中しているのは、詩人に残された時間に反比例しているからであろう。

このうち『詩集』で独自の改稿がなされている詩篇をC群s(シングルの意)と分類し、対してほぼ初出版に拠った詩篇をD群と分類したい。C群sは六篇、D群は二七篇となる。C群sは、『詩集』掲載順に「2」「昆虫」(初出『ヴァリエテ』一、三〇年八月)、「3」「私の写真」(初出『白紙』一一、三〇年一〇月)、「42」「毎年土をかぶらせてね」(初出『今日の文学』三一、三三年一月)、「63」「暗い歌」(初出『日本詩壇』二一五、三四年七月)、「64」「花」(初出『カイエ』八、三四年七月)、「69」「1.2.3.4.5」(初出誌不明)、『詩集』未収録の「68」「指間の花」『呼鈴』二〇、三四年九月の抜粋

か)の六篇である。

「2」「昆虫」は、詩人のデビュー作である。初出の「私はいま痣を乾す。」が、『詩集』では「私はいま殻を乾す。」に改められ、映像的にも微妙に意味合いを異にしている。また「63」「暗い歌」では、題名が「暗い唄」から「暗い歌へ」、本文も「カアペットの土の上を」を「新しいカアペットの土の上を」などと『詩集』で改められている

「3」「私の写真」は、初出『白紙』を未見であるため本文の比較はできないが、「秋の写真」との初出題名が『詩集』で改められている(いずれかが誤植の可能性もある)。同じように『詩集』版で独自に改題したシングル作品には、初出「冬の詩」(『今日の文学』)を改題した「42」「毎年土をかぶらせてね」、初出「68」「指間の花」(『呼鈴』)を改題した「69」「1.2.3.4.5」がある。

『詩集』未収録の「指間の花」は、街路や並木、馬が駆ける丘、キャベツ畑と、六章立ての短詩が脈絡なく連続していく。二章全文を引用する。

ベコニヤは支那の婦人の靴を連想する。桃色の小さい豊かな花卉が  
カアテンをあげたばかりのフレムの中に湿つてゐる。

並木の下で少女は緑色の手を挙げて誰かを呼んでゐる。植物のやうな皮膚を驚いて見てゐると、やがて絹の手袋をぬいだ。(「指間の花」部分)

ここから後半部分を抜粋、「並木の下で少女は緑色の手を挙げてゐる。／植物のやうな皮膚におどろいて、見るとやがて絹の手袋を脱ぐ。」(全篇)と改めたのが、「1.2.3.4.5」である。

カーテンを開けた窓枠の先、ベコニアの花の向こうの並木の下で、少女が誰かを呼ぶために手を挙げてゐる。どこでなぜといった文脈が改作

後は全て切り取られた。文脈を切断することでモダニズム詩としての強度を増している。さらに「ぬいだ」から「脱ぐ」へ時制を変化、ストップモーションのように時間と動作を止めて一枚の映像詩に変換している。ほぼ別の作品になったといつてよいだろう。

このように初出版の一部分を『詩集』で抜粋する大胆な改稿がなされた例としては、初出版全三章のうち一章のみを抜粋した「64」「花」(『カイエ』)がある。

さて、これら『詩集』のシングル作品に対し、雑誌で再掲され何らかの改稿が施された詩篇が四〇篇前後ある。前章で分類したように、そのうち直近の再掲版ではなく、ほぼ初出版に拠ったA群dが一二篇。直近の再々掲版ではなく、ほぼ再掲版に拠ったA群tが二篇。直近のヴァリアントを反映するという「覚書」に反したA群に対し、「覚書」通りに直近の再掲版にほぼ拠ったB群が二〇篇である。

さらにこれらとは別に、初出版と再掲版が混在し、またはその上に独自の改稿が施された複雑な形態を有する詩篇を、C群d(ダブルの意)と分類したい(『詩集』A群、D群の整理図を本稿「むすびにかえて」に掲げた)。

『詩集』掲載順にC群d該当詩篇は、「4」「朝のパン」(初出『文芸レビュー』二一九、三〇年一〇月、再掲『詩と詩論』一二、三二年六月)、[10]「緑の焰」(初出『新形式』三、三一年六月、再掲『詩と詩論』一四、三一年二月)、[35]「眠つてゐる」(初出『文芸汎論』二二二、三二年二月、再掲『文学』四、三二年二月)、[62]「果実の午後」(初出『椎の木』三一六、三四年六月、再掲『日本詩壇』二一五、三四年七月)、編者が年代不明とした巻末部の[31]「The street fair」(初出『椎の木』一一〇、三二年一〇月、再掲『行動』一一三、三二年二月)の五篇である。

C群dの具体例を整理する。「4」「朝のパン」は、初出『文芸レビュー』版の「朝の麵麴」ではなく、再掲『詩と詩論』にしたがった題名だ。本

文も基本的に再掲版に多く拠るが、「最後の麵麩」など数か所は初出版の表現が見られる。「10」「緑の焰」も初出・再掲が混在している。

初出版と再掲版の混在以上の独自の改稿が施されている作品もある。「35」「眠つてゐる」は、初出の『文芸汎論』版を主として、「花園の枯れる」ではなく「庭園の枯れる」と再掲『文芸汎論』版の表現を交え、さらに「彼女は不似合な金の環をもつてくる。」と、独自の改稿が施されている。

「16」「The street fair」は、例えば再掲『行動』版の「道もなく星もない／花も咲かない空虚な街。」ではなく、「道もなく星もない空虚な街」の初出『椎の木』版に数か所拠りつつ、「時を殺害するためにやつて来る」と再掲『行動』版も数か所混在している。さらに「白く馬が這ひあえぎまはつてゐる如く。」（初出『椎の木』）でも、「白い馬が喘ぎまはつてゐる如く」（再掲『行動』）でもなく「白く馬があへぎまはつてゐる如く」と『詩集』独自の改稿がなされ、加えて初出・再掲版にあった句点が外された。

「62」「果実の午後」は、「象牙の Key を」（初出『椎の木』）でも、「象牙のキイを」（再掲『日本詩壇』）でもなく、「象牙の鍵を」と『詩集』独自の改稿が確認できる。

以上のような『詩集』独自の改稿部分が含まれる詩篇を、本稿で「C群」と分類したのである。もちろん、仮名遣い・畳字の処理など極めて些細な違いが一部あるのみと判断した詩篇は、独自の「改稿」とは見なしていない。とはいえ、「C群」に分類した詩篇でも、改稿ではなく単なる誤記・誤植であったり、編者による部分的な改変処理が含まれている可能性は否定できない。

同時に二章で言及したような、左川ちか自身が椎の木社版詩集のため準備し始めていた一部の整理稿など関連資料が、本人または兄川崎昇や

百田宗治から伊藤整の手元に渡り、『詩集』編纂に反映されたという可能性をここで指摘しておきたい。

評伝「黒い天鵝絨の天使 左川ちか小伝」（一九七二）を著した小松瑛子も、『詩集』について「おそらく、作品の原稿整理は、百田宗治のすずめもあつて整理されたものであろう」と推測している<sup>⑦</sup>。

整理稿の存在を窺わせる詩篇として、例えば「C群s」の「63」「暗い歌」をあげよう。初出は『日本詩壇』二一五（三四年七月）で、既述したように題名は「暗い唄」であった。実は極めて珍しいことに『日本詩壇』に掲載された直筆原稿が現存している<sup>⑧</sup>。原稿と雑誌版の字句に全く相違はない。

「覚書」⑤の発表誌一覧から『日本詩壇』は漏れている。編者の手元に掲載号がなかったものと思われる。初出『日本詩壇』版と『詩集』版を次に全文引用する。

#### 暗い唄

咲き揃つたカアペットの<sup>上</sup>を、／二匹の驢馬がトロツコを押してゆく。／静かにゆつくりと／奢れる花びらが燃えてゐる道で、／シルクの羽は花粉に染まり。／彼女の爪先がふれるところは／白い虹がゑがかれる。  
（『日本詩壇』、傍線部引用者）

#### 暗い歌

咲き揃つた新しいカアペットの<sup>上</sup>を／二匹の驢馬がトロツコを押して行く／静かに ゆつくりと／奢れる花びらが燃えてゐる道で／シルクの羽は花粉に染まり／彼女の爪先がふれる処は／白い虹がゑが

かれる。〔詩集〕、傍線部引用者)

傍線部七か所の相違点がある。文字の空白や送り仮名の処理など些細なものも含まれるが、題名の「唄」が「歌」に変更され、句読点の処理が複数変更されている。何より「新しいカアペットの土を」と形容詞が加えられている。编者自身がこれを勝手に変更したというより、『日本詩壇』版ではない原稿を编者が参看していたのではないかと考えた方が蓋然性があるのではないだろうか。

なお「62」「果実の午後」も『日本詩壇』同号の初出である。これも校異上、初出版反映の形跡に乏しく、既述したように「象牙の鍵キを」との『詩集』独自の表現がなされている。

「冬の詩」から改題された「42」「毎年土をかぶらせてね」、大胆に抜粋された「64」「花」と「69」「1.2.3.4.5」なども、未知の掲載誌が発見されない限り、改稿された本人の原稿が別にあつたとの可能性は否定できない。

また[C群]の一部以外にも、結果として雑誌版とほぼ同じであるものの、実際には整理稿に拠つた詩篇が存在する可能性はある。ただ左川ちかの詩は、程度の差はあれ、初出・再掲・再々掲と繰り返し細かに改稿する詩篇ばかりである。推敲しながら改稿に及ばなかつた整理稿がそれほど存在したとは考えにくい。

とはいえ、以上はあくまで可能性の指摘に過ぎず、あまり過大評価はできない。整理稿や直接の編纂資料などの現物が確認されていない以上、校異や諸状況からの推測である。確証に乏しいとの批判は甘受せざるを得ない。改稿前後の詩篇そのものの内容検討を含め、今後の調査研究の進展に委ねたい。

なお伊藤整自身は、詩集出版の際に詩篇を改稿する行為をどのように

考えていたか。随筆「詩の話」(『文芸通信』三一九、三五年九月)が参考に

なる。改稿は「初恋の少女のあどけない顔に隆鼻術を施すやうなものである」と例える。「頭の中に定着した詩句の魅力は、一行二行をより美しく妥当に書き改めたりすることは全然比較することもできぬ、絶対のものだからである」とし、詩友丸山薫の詩集『幼年』(四季社、三五年)の出版会で「読者を侮辱するやうなもので大変怪しからぬ」と批判したと記している。

もつとも三五年夏、ボン書店の鳥羽茂に第二詩集出版を持ちかけられたことに触れ、詩句をそらで覚えるような真剣な読者は自分にはいないのであるから「校正刷で手を加へるであらう」と吐露している。詩集名『呑咲く村』、三六年一月刊行予定として、雑誌『詩学』三五年九月号他で告知されたが、書店側の事情で実現しなかつたようだ。『冬夜』と改題した第二詩集が近代書房より刊行されたのは三七年六月のことである。

「詩と話」の記述から既に「自分の詩二十篇ばかりを鳥羽君に渡して」いたことがわかる。『冬夜』には第一詩集『雪明りの路』(椎の木社、二六年)から再録した一〇篇を除き、二三篇の詩篇が新たに収録されている。『呑の村』に収録予定だった詩篇は不明だが、『冬夜』の単行本初収録詩篇の数とほぼ同じである。実際に『冬夜』では詳細を省くが、「海の捨児」「いま帰れば」「田園故郷を失ふ」など少なくとも改稿が施されている。詩の改稿をめぐる伊藤整自身の揺れ動きを指摘しておきたい。

### むすびにかえて

『詩集』編集上の特色と問題点について、「覚書」を中心に校異を踏まえ検証した。雑誌掲載版との関係において、暫定的に『詩集』収載詩篇を次のように分類した。

## 『左川ちか詩集』七六篇

◇再々掲載まで有する詩（トリプル）

↓**A群t**（ほぼ再掲載に拠る）二篇 「覚書」②に相違

◇初出版と再掲載を有する詩（ダブル）

↓**A群d**（ほぼ初出版に拠る）一二篇 「覚書」②に相違↓**B群**（ほぼ再掲載に拠る）二〇篇 「覚書」②に準拠↓**C群d**（初出版と再掲載混在、「詩集」独自の改稿）五篇↓**未分類**（雑誌未見）四篇<sup>⑧</sup>

◇初出版のみの詩（シングル）

↓**C群s**（『詩集』独自の改稿）六篇↓**D群**（ほぼ初出版に拠る）二七篇

覚書②の原則に反し、直近の改稿版を反映していない**A群**が一四篇。原則に準拠し、直近の改稿版を反映している**B群**が二〇篇。『詩集』で独自の改稿が施された**C群**が一篇。初出誌一回のみの作品でほぼそのまま反映する**D群**が二七篇。以上のように、収録詩篇の数々が多様な形態をとりながら混在している状況が指摘できよう。生前の詩人の作品（雑誌掲載版）との関係において、書誌学的にも極めて慎重な取り扱いを要するテキストなのである。

編集実態の全貌を明らかにすることは難しいが、それでも『詩集』は雑誌資料の欠落が目立ち、「覚書」の編纂方針が徹底されておらず、整理稿の存在は一部想定されるものの、詩人の直近の改稿版を十全に反映してはいないと暫定的に結論できる。

かように遺漏の目立つ編纂がなぜなされたか。当初予定されていた百田宗治から編者が交代したことに伴う混乱もあろう。一般に刊行時期の

遅れることが望ましくない遺稿集というスケジュールの問題もあろう。この時期の整の動向を整理してみよう。

三六年一月にちかが死去した後、三月に転居。四月にロレンス『恋愛論』翻訳刊行。五月に小説「浪の響のなかで」発表。かつての読者高山タミとの過去を激しく糾弾され、家庭争議を抱えながら、一年以上に及んだ相手方とのやり取りが続いていた。六月に妹優を見舞い帰郷するも一〇月に病死。一月に高山タミ死去。秋冬は『ユリシーズ』再読や中編小説「幽鬼の街」構想執筆を抱えていた。そのような状況でちかの一周忌前、三六年一月に『詩集』が出版されている。公私ともに余裕のない状態で資料整理と編集作業が行われていた酌量すべき事情があった可能性はある。

もつとも編者の関与のあり方も異なる当時の遺稿集に、現代の編集水準を求めることが本稿の目的ではない。むしろ、二四歳で亡くなった一人の女性が遺した言葉を、時間的に制限された遺稿詩集というかたちでも今に残したこと、その意義は十二分にあつたとすべきであろう。しかし、詩人の声を伝えるテキストとして、果たしてどれだけの強度を現在も『詩集』が持ち得るだろうか。

左川ちかが文学史上、現代詩の起点となる詩人と見なされるようになった近年にあつても、多くの論者はその詩を扱う際、『詩集』もしくは『詩集』を底本としたテキストに依拠してきたが、慎重な史料批判は不可欠である。個別の詩篇に關しても初出版、再掲載、『詩集』版との連続と差異を踏まえる視点が要請されよう。少なくとも、『詩集』または『詩集』を底本とする従来の単行本を無批判に用いることは、詩人の営為に対して誠実な研究態度とはいえない。

そもそも左川ちかの詩のヴァリアントの多さをどう考えるか。具体的な表現と内容に踏み込む余裕は本稿にないが、見通しをいえば、詩人の

度重なる推敲それ自体が、単なる字句の修正にとどまらず、創作的な試みとしてあったのではないか。例えば、五章で言及した「68」「指間の花」に対する「69」「1.2.3.4.5」の他に、「35」「眠つてゐる」「27」「神秘」「24」「白と黒」「28」「夢」「33」「The mad house」の五篇に対する「38」「睡眠期」。「13」「死の髻」に対する「21」「幻の家」。「83」「海の捨子」に対する「86」「海の天使」などが、各々自律的な関係を持つ改作詩となっている点で典型例と考える<sup>②</sup>。

絶え間なく改稿を続けた宮沢賢治作品が、「幾重にもわたる手入れ・書直し・改作等のが見られるが、それらによつてたどり得る各々の段階の形態は、単なる『完成への過渡的形態』にとどまらない意義を有している」と指摘されるように、左川ちかにあつても推敲後の詩は、文脈や時制を微妙に異にし、各々が別の詩として立ち現れているように思う。稿者は二〇一九年秋、市立小樽文学館で開催された「歿後五〇年 伊藤整と北海道展」で、遺族所蔵の伊藤整の初期詩稿、詩集『雪明りの路』の原稿を見したが、相当に朱を入れている。今後、生成するテキストという視点で、伊藤整詩篇の改稿を原稿レベルから検証する動きが生まれることを期待したい<sup>③</sup>。

左川ちかは、一篇の詩の絶えまない改稿改作を通じ、繊細大胆に違える詩的世界の表現に挑戦し続けた詩人ではなかったか。伊藤整が編纂した『左川ちか詩集』は、かかる多彩な詩の一断面を切り取つたものにと過ぎない。詩篇変貌の未完の可能性を探る上で、書誌・校異研究が有する意義は決して小さくないのである。

## 注

- ① 普及版・特製版ともに国会図書館デジタルコレクション図書館送信資料として現在公開されている。

昭森社『左川ちか詩集』（一九三六）の書誌的考察

② 「二月八日に物故した椎の木社同人左川ちかの遺稿詩集を、近く椎の木社から刊行する。編纂者伊藤整。（後略）」と『詩集』の予約告知文にある（『椎の木』五・二、一九三六年二月、五三頁）。無署名の告知文であるが、百田宗治の手になるものであろう。

③ 「刊行者は伊藤整である」と、川崎昇が小松瑛子に直接語っている（小松瑛子「黒い天鵝絨の天使―左川ちか小伝―」『北方文芸』五卷一―一、一九七二年一月、九頁／日本大学藝術学部『江古田文学』六三―二〇〇六年一月に再録）、同「評論左川ちかの詩の形成」『小樽詩話会』一九九九年二月号、六七頁。ちかの詩友江間章子も「編集者の名は伊藤整であった」と回想している（江間章子「詩人としてこの世に生まれた女性 ハポエジューヴというケープを肩にかけて逝く」『図書新聞』一九八四年一月一日）。

④ 島田龍「左川ちか研究史論―附左川ちか関連文献目録増補版」『立命館大学人文科学研究所紀要』一一五号、二〇一八年三月）、同「詩人の誕生―初期伊藤整文学と川崎昇・左川ちか兄妹」『立命館大学人文科学研究所紀要』一一八号、二〇一九年一月）、同「海の詩人 伊藤整と左川ちか―『海の捨児』から『海の天使』へ―」『日本思想史研究会会報』三三五号、二〇一九年一月）、同「左川ちか年譜稿」『立命館大学人文科学研究所紀要』一二二号、二〇二〇年二月）

⑤ 二人の個人的な関係については、曾根博義「伝記・伊藤整 詩人の肖像」（六興出版、一九七七年）、川西政明「伊藤整の性と愛」（『新・日本文壇史』五、岩波書店、二〇一二年）、島田龍前掲「左川ちか年譜稿」参照。

⑥ 『国文学解釈と教材の研究』『学界教育界の動向』（一九八一年八月号、一七三頁）に題名等の記載があるが、発表者名はない。中央大学国文学研究室提供の川崎浩典（中央大学法学部生）レジュメには、『詩集』「左川ちか詩集覚え書―刊行者」、ちかの「夏のをほり」と「季節」、「死の髻」と「幻の家」というヴァリアント、整の「海の捨児」とちかの「海の捨子」などが資料添付されている。

⑦ 島田龍「左川ちかを探して（一）「硝子の道」と藤村青一「淡水と気温」」（『螺旋の器』二、森開社、二〇一八年一月）

⑧ 百田宗治「左川ちかの死」（『椎の木』五冊二年、一九三六年二月）、同

「天折した女詩人左川ちか」(『目 auge』一九三六年一月号)、「詩集のあとへ」と改題し『左川ちか詩集』に再録／「左川ちかのこと」と改題し『私の綴方帖』に再々録、大和出版社、一九四二年／『爐邊詩話』柏葉書院、一九四六年で内容増補し再々録)。引用は「詩集のあとへ」一六三頁。

⑨ ちかを見舞った妻貞子から病状を聞いていたことは、ちかの病床日記(二月二日)や百田「詩集のあとへ」から確認できる。

⑩ 曾根博義前掲『伝記・伊藤整』五三〇頁。引用は百田宗治前掲「詩集のあとへ」一六三頁。

⑪ 初出は『椎の木』五―三(一九三六年三月)。無署名。川崎昇が協力した小野夕靄・曾根博義・川崎浩典編『左川ちか全詩集』(昭森社、一九八三年)「解題」に「左川ちか小伝」は川崎昇編と明記されている。二六〇頁。

⑫ 『稀観本の世界』<https://kikoubon.com/shoi.htm> 最終閲覧日二〇二〇年七月二五日

⑬ 島田龍前掲「詩人の誕生」、同「左川ちか年譜稿」

⑭ 島田龍前掲「海の詩人」

⑮ 曾根博義「伊藤整の出発―詩人としての恋愛体験―」(『文芸四季』一、一九七四年一月)、小松瑛子「海の天使左川ちかの詩」(『ラ・メール』一、一九八三年七月)、川西政明「伊藤整の性と愛」(『新・日本文壇史五』岩波書店、二〇一一年)

⑯ 島田龍「詩人の終焉―(詩とのわかれ)と伊藤整、「浪の響のなかで」から『左川ちか詩集』(一九三六)へ」(『文学史を読みかえる』研究会編

『文学史を読みかえる・論集三』インパクト出版会、二〇二〇年八月)

⑰ 小松瑛子前掲「黒い天鵝絨の天使」九九頁。

⑱ 青木正美氏旧蔵。保昌正夫監修・青木正美解説『近代詩人・歌人自筆原稿集』(東京堂出版、二〇〇二年)に写真が掲載されている。この原稿の行方に関しては、内堀弘「下町の古本屋の懸命な好奇心 独学の意欲があ

れば古書の世界は一生学校だ」(『図書新聞』二〇一九年一〇月五日)に詳しい。

⑲ 以下の四篇は稿者未見の雑誌があるため判断を保留した。「8」『錆びたナイフ』(初出『白紙』一三、三二年四月・未見、再掲『詩と詩論』一二、三一年六月)、[45]『雪の門』(初出『海盤車』二一八、三三年四月・未見、再掲『行動』一一三、三三年一月)、[50]『むかしの花』(初出『新人早稲田』一四、三三年六月・未見、再掲『椎の木』二一九、三三年九月)、[65]『午後』(掲載誌不明、『書帷』三四年七月〜九月号頃か・未見)。

⑳ 改稿以前と以後で異なる詩情に変貌する作品については、「海の捨子」「海の天使」を助詞の変化などから考察した島田龍前掲「海の詩人」、「死の髻」「幻の家」を論じた戸塚学「私たちのモダンティニ 左川ちか」「死の髻」「言葉」―世界を二重化する言葉」(『奏』三八、二〇一九・六)も参照されたい。

㉑ 『新・校本宮沢賢治全集』「凡例」(筑摩書房、一九九五〜二〇〇九年)

㉒ 小説に関しては近年、飯島洋が一連の研究で、初期小説以来の草稿・雑誌初出稿から改稿版に至るまで現存原稿を資料に、生成するテキスト論を展開している。飯島の近稿に「伊藤整『発掘』の原稿について―人間認識の転回―」(『日本近代文学館年誌 資料探索』一五、二〇二〇年三月)、「伊藤整「灯をめぐる虫」における〈仮面紳士〉―原稿にみる理論の投影」(『近代文学資料研究』三、二〇二〇年三月)がある。

謝辞 川崎浩典氏による学会報告の記録調査と資料を提供して頂いた、中央大学国文学研究室関係者の方々を始め、お力添え頂いた皆様に深く謝意を表したい。

(本学人文科学研究所研究員 H041958@gmail.com)

『左川ちか詩集』校異

凡例

一、雑誌・書籍発行日は例えば一九三〇年一月の場合、三〇〇一と略した。

一、『左川ちか詩集』を【詩集】、その他雑誌等を適宜略した。例：『ヴァリエテ』【ヴァ】

一、詩篇の校異は『詩集』の配列順に列記した。

一、各詩篇の「」内に作品番号を付した。一覧は本文「一、ちかの詩篇一覧」参照。

一、【】上部の数字は『詩集』での詩行を示し、異同詩行を抜き出した。

一、※はその他の注記である。

一、↓は編者（伊藤整）の採用したテキストや編纂態度の推定である。

雑誌に三度掲載された作品で『詩集』「覚書」に反し、直近の再々掲載に拠っていない詩篇を【A群t】。雑誌に二度掲載された作品で「覚書」に反し、直近の再掲載に拠らず初出版にほぼ拠った詩篇を【A群d】。逆に「覚書」に準拠し、直近の再掲載にほぼ拠ったと判断できる詩篇を【B群】。初出版と再掲載が混在、またはその上に『詩集』独自の改稿が認められる詩篇を【C群d】。雑誌に一度掲載された作品で『詩集』独自の改稿が認められる詩篇を【C群s】。雑誌に一度掲載された作品で初出版にほぼ拠ったと判断できる詩篇を【D群】と略記した。未見の雑誌を含む詩篇は判断を保留し【未】と略記した。

一、生前のアンソロジーである越佐詩人協会編『越佐詩歌集』（一九三〇）、百田宗治編『詩抄』一（椎の木社、一九三三）は、初出版・再掲載の検討対象から外し、校異の参考資料扱いにとどめた。

【一九三〇〜三一年初出詩】

【2】「昆虫」『ヴァリエテ』一（三〇〇八）

3 【ヴァ】 衣裳を裏返へして、

【詩集】 衣裳を裏返して、

5 【ヴァ】 私はいま痣を乾す。

【詩集】 私はいま痣を乾す。

※『ヴァリエテ』原文は横組み

↓「痣↓殻」は編者の独断というより整理稿に拠るか。【C群s】

【4】「朝のパン」『文芸レビュー』二一九（朝の麵麴）三〇一〇、『詩と

詩論』一二（改題「朝のパン」三一〇六）、百田宗治編『詩抄』一（三三〇三）

【文芸】 題名「朝の麵麴」

【詩論】 【詩抄】 【詩集】 改題「朝のパン」

1 【文芸】 幾人もの友達

【詩論】 【詩抄】 【詩集】 幾人もの友等

3 【文芸】 【詩抄】 シルクハット

【詩論】 【詩集】 シルクハット

4 【文芸】 か、へて。

【詩論】 【詩抄】 【詩集】 かかへて。

6 【文芸】 遂に私も

【詩論】 【詩抄】 【詩集】 つひに私も

7 【文芸】 【詩論】 男等の

【詩抄】 男らの

【詩集】 男等の

8 【文芸】 一群が溺死してゐる。彼等の衣服が

【詩論】 一群が溺死してゐる。／彼等の衣服が

- 【詩抄】 一群が溺死してゐる。／彼らの衣服が  
 【詩集】 一群が溺死してゐる。／彼等の衣服が  
 10 【文芸】 最後の麵麩  
 【詩論】 【詩抄】 最後のパン  
 【詩集】 最後の麵麩

※ 【詩抄】 では一行目と二行目の間に一行空きなし。

↓ 【詩と試論】 版と『文芸レビュー』版が混在。整理稿に拠るか。 **C群d**

[3] 「私の写真」『白紙』一一(三〇一〇)

【白紙】 題名「秋の写真」

【詩集】 改題「私の写真」

※ 【白紙】 本文未見。

↓ 改題は『詩集』の誤植か、編者の独断か、整理稿か。 **C群s**

[8] 「錆びたナイフ」『白紙』一三(三二〇四)、『詩と詩論』一一(三二〇六)

2 【詩論】 釣り下がる。

【詩集】 吊り下がる。

6 【詩論】 奪ひ去るやうに

【詩集】 奪ひ去るやうに

※ 【白紙】 本文未見。 **未**

[7] 「黒い空気」『今日の詩』五(三二〇四)、『詩と詩論』一一(三二〇六)

2 【今日】 水の中で

【詩論】 【詩集】 水の中では

3 【今日】 樹の上から下りて来て

【試論】 木の上から降りて来て

【詩集】 樹の上から降りて来て

3 【今日】 とりまく。／森林や窓硝子が

【詩論】 【詩集】 とりまく。林や窓硝子は

4 【今日】 夜が完全にひろがる。／乗合自動車が

【詩論】 【詩集】 夜は完全にひろがった。乗合自動車は

6 【今日】 感情が街ぢうを踊りまはる。

【詩論】 【詩集】 感情は街中を踊りまはる

↓ ほぼ『詩と詩論』版に拠りつつ、三行目は漢字を改める。 **B群**

[9] 「雪が降つてゐる」『新形式』二(雪が降る)三二〇五)、『詩と詩論』

一二(改題「雪が降つてゐる」三二〇六)

【新形式】 題名「雪が降る」

【詩論】 【詩集】 改題「雪が降つてゐる」

2 【新形式】 【詩論】 いたずらな

【詩集】 いたづらな

2 【新形式】 ステップ

【詩論】 【詩集】 ステップ

5 【新形式】 私の指にしるびよる

【詩論】 屋根裏を静に這つてゐる。私の指をかじつてゐる。気づか

はしさうに。

【詩集】 屋根裏を静かに這つてゐる。私の指をかじつてゐる。気づ

かはしさうに。

6 【新形式】 夜の十二時

【詩論】 【詩集】 夜十二時

6 【新形式】 背中を向けて

【詩論】 【詩集】 背部をむけて

8 【新形式】 時間が埋められ、地上は貪つてゐるように見える。

【詩論】 【詩集】 時間は埋められ、地上は貪つてゐる。

※ 【新形式】 は後ろ二行以外句点なし。

↓ ほぼ『詩と詩論』版に抛りつつ、五行目は送り仮名を改める。 **B群**

〔10〕 【緑の焰】 【新形式】 三（三一〇六）、『詩と詩論』一四（三二二二）

6 【新形式】 髪の毛

【詩論】 【詩集】 髪の毛

7 【新形式】 塗りかへる

【詩論】 【詩集】 塗る

7 【新形式】 霧のやうに

【詩論】 霜のやうに

【詩集】 霧のやうに

11 【新形式】 【詩論】 さへぎる

【詩集】 さへぎる

12 【新形式】 くぐつて

【詩論】 くぐつて

【詩集】 くぐつて

19 【新形式】 忘却の穴の中へ

【詩論】 忘却の穴へ

【詩集】 忘却の穴の中へ

20 【新形式】 【詩論】 話かけることも

【詩集】 話しかけることも

21 【新形式】 眼は緑色に染つてゐる 信じてゐる

【詩論】 眼は緑に染められ信じてゐる

【詩集】 眼は緑色に染まつてゐる 信じてゐる

23 【新形式】 【詩論】 誰か？／私を睡眠へ

【詩集】 誰か？私を睡眠へ

※ 『詩論』には句読点あり。

↓ 『新形式』版と『詩論』版や改行・句読点の異同が混在しており、整理稿に拠るか。 **C群d**

〔6〕 【出発】 『今日の詩』三（三一〇二）、『詩と詩論』一二（三二〇六）

1 【今日】 夜の口が開く。森と時計台が

【詩論】 【詩集】 夜の口が開く森や時計台が

3 【今日】 音楽の一片に、自動車や白いスカアツに

【詩論】 【詩集】 音楽の一片に自動車やスカアツに

4 【今日】 切られて飾窓に飛び込む

【詩論】 【詩集】 切り鉢まれて飾窓の中へ飛び込む。

5 【今日】 朝を匂はせる

【詩論】 【詩集】 朝を匂はす。

6 【今日】 それでも太陽は青いろに数を増す

【詩論】 【詩集】 太陽はそれでも青色に数を増す。

7 【今日】 輪を投げる

【詩論】 【詩論】 輪を投げる。

8 【今日】 太陽を捕えるために。

【詩論】 太陽等を捕えるために。

【詩集】 太陽等を捕へるために。

※ 【今日】 は横組み。

※ 六行目と七行目、【今日】 【詩集】 は一行空き、【詩論】 は二行空き。

↓ ほぼ『詩と詩論』版に拠るが、前後の配列順から『今日の詩』を編

者は落とした可能性。 **B群**

「1」『青い馬』『白紙』一〇(三〇〇八)、『越佐詩歌集』(三〇一二)、『詩と詩論』一二(三二〇六)

4 【白紙】越佐 テラスのお客達はあんなにレガレットを

【詩論】越佐 テラスの客等はあるにシガレットを

5 【白紙】越佐 女の頭の落書きがいくつも残る。

【詩論】越佐 貴婦人の頭髮の輪を落書きしてゐる。

6 【白紙】越佐 恋や悔恨やエナメルの

【詩論】越佐 恋と悔恨とエナメルの

8 【白紙】越佐 飛び下りないで

【詩論】越佐 飛び降りずに

※【白紙】は全一行空き。後ろ二行一字下げ。

※【越佐】は句点とーなし。一文毎に改行。

※最終行「海が天にあがる」の前、【白紙】は一行空き、【越佐】は一行空きなし、【詩論】は二行空き、【詩集】は一行空きなし。

↓ほぼ『詩と詩論』版に拠る。前後の配列順から『白紙』を編者は落とした可能性。 **B群**

「12」『緑色の透視』『レスプリ・ヌウボオ』二二(三二〇七)

※【レスプリ】と【詩集】に異同なし。

↓『レスプリ・ヌウボオ』版に拠る。 **D群**

「13」『死の髻』『今日の詩』一〇(三二〇九)

5 【今日】驅脚

【詩集】驅け脚

※【詩集】には「死の髻」と「幻の家」、どちらも収載。

↓ほぼ『今日の詩』版に拠る。「死の髻」と「幻の家」の併載は「覚

書」にあるように編者の判断。関連詩「21」『幻の家』『文学』一(三二〇三) **D群**

「16」『季節のモノクル』『白紙』一五(三二一一)、『詩と詩論』一四(三二一二)

2 【白紙】ここを行つたり来たりして、彼等の虚栄心と音響をもつ。

【詩論】越佐 此処を行つたり来たりして、／彼らの虚栄心と音響をほこぶ。

6 【白紙】ひびいてさまよう。

【詩論】越佐 ひびいてさまよふ。

7 【白紙】ひびいてさまよう。

【詩論】越佐 ひびいてさまよふ。

↓ほぼ『詩と詩論』版に拠る。 **B群**

「11」『青い球体』『白紙』一四(朝)三二〇七、『詩と詩論』一四(改題

『青い球体』三二一二)

【白紙】題名「朝」

【詩論】越佐 改題「青い球体」

1 【白紙】かなづちをもつて黒い着物をきた男

【詩論】越佐 鐵槌をもつて黒い男

2 【白紙】むこうのはしと

【詩論】越佐 向の端と

【詩集】越佐 向ふの端と

2 【白紙】戸に穴をあける。

【詩論】越佐 戸を破る。

から編者は『白紙』を落とした可能性。 **B群**

- 3 【白紙】朝は其処にゐる。さうすれば彼らの街がならべられる。  
 【詩論】【詩集】朝はそこにゐる、さうすれば彼らの街が並べられる  
 4 【白紙】太陽は  
 【詩論】【詩集】ペンキ屋は  
 5 【白紙】鎧戸と壁に林檎園は  
 【詩論】鎧戸と壁に、／林檎園は  
 【詩集】鎧戸と壁に。／林檎園は  
 7 【白紙】その中で  
 【詩論】【詩集】その中を  
 8 【白紙】庭の隅ではひまはり草がまはつてゐる。まはりながらまはりながら、  
 【詩論】【詩集】庭の隅で向日葵がまはつてゐる、まはりながら、まはりながら、  
 9 【白紙】部屋の中まで入つて来て次第に大きくなり輝いてゐる球になる。  
 【詩論】【詩集】部屋の中までころげこみ大きな球になつて輝く。  
 11 【白紙】温いパンが太陽からか、へきれぬ程とゞいたので私等はそれ等の家と共に、  
 【詩論】太陽はかゝえ切れぬ程の温いパンで、私らはそれ等の家と共に  
 【詩集】太陽はかかへ切れぬ程の温いパンで、私らはそれ等の家と共に  
 12 【白紙】地平線につて世界一週を試みる。  
 【詩論】【詩集】地平線に乗つて世界一週をこころみる。  
 ↓ほぼ『詩と詩論』版に抛るが、句読点や畳字に異同。前後の配列順

〔14〕「断片」『今日の文学』一一九（「断頭機」三二〇九）、『詩と詩論』一四  
 （改題「断片」三一二二）

- 【今日】題名「断頭機」  
 【詩論】【詩集】改題「断片」  
 1 【今日】青い士官が並んでゐる。  
 【詩論】【詩集】青い士官の一隊がならんでいる。  
 3 【今日】戦つてゐるやうに見える。  
 【詩論】【詩集】争つてゐるやうに見える。  
 4 【今日】アンテナ線はその上をきつて走る。  
 【詩論】【詩集】アンテナはその上を横ぎつて走る。  
 5 【今日】浮いてゐる。  
 【詩論】【詩集】浮いてゐるのだらうか？  
 6 【今日】のぼつてゆく。  
 【詩論】【詩集】かけのぼる。  
 7 【今日】赤くさびた夏の感情はまもなく私らの恋も断つだらう。  
 【詩論】まもなく赤くさびた夏の感情は私らの恋も断つだらう  
 【詩集】まもなく赤くさびた夏の感情は私らの恋も断つだらう。  
 ↓ほぼ『詩と詩論』版に抛るが、句点を加える。前後の配列順から編者は『今日の文学』を落としたか。 **B群**
- 〔15〕「ガラスの翼」『今日の文学』一一一〇（三一〇〇）、『詩と詩論』一四  
 （三一二二）
- 1 【今日】わたしていった  
 【詩論】【詩集】渡していった  
 3 【今日】まはる毎に色が濃くなる。  
 【詩論】【詩集】まはるたびにいろが濃くなる。

5 【今日】 棒を引いてゐる。屋根らはよりかかつて。

【詩論】 棒を引いてゐる、屋根らは凭りかかつて。

【詩集】 棒を引いてゐる／屋根らは凭りかかつて。

7 【今日】 匂つてゐる電車と水兵の翻つてゐる襟、空気の皺の間を旋廻してゐる。

【詩論】 【詩集】 電車は匂ひ、空中の青い皺の間を旋廻する水兵の襟。

9 【今日】 盛装した夏の行列が通りすぎては硝子のかげらの中で崩れる。

【詩論】 【詩集】 盛装して夏の行列は通りすぎフラスコの中へ崩れる。

10 【詩論】 私らの心の果実は（二字下げ）

↓ ほぼ『詩と詩論』版に拠るが、句読点・改行の処理を加える。前後の配列順から編者は『今日の文学』を落としたか。 **B群**

【一九三二年初出詩】

[17] 「循環路」『椎の木』一一一（三二〇二）、『文学』一（三二〇三）

7 【椎木】 叩けば音がする。夜が

【文学】 【詩集】 叩けば音がする。／夜が

↓ 『文学』版に拠る。 **B群**

[21] 「幻の家」『今日の詩』一〇（「死の髯」三二〇九）、『文学』一（改題

「幻の家」三二〇三）

【今日】 題名「死の髯」

【文学】 改題「幻の家」

3 【文学】 驅出す

【詩集】 驅け出す

↓ ほぼ『文学』版に拠る。関連詩「13」「死の髯」『今日の詩』一〇（三二〇九） **D群**

[20] 「記憶の海」『文学』一（三二〇三）、『詩抄』一（三二〇三）

6 【文学】 【詩抄】 驅けてわたる。

【詩集】 駆けてわたる。

↓ ほぼ『文学』版に拠る。 **D群**

[19] 「青い道」『反響』四（三二〇二）、『文学』一（三二〇三）

4 【反響】 染色工場!!

【文学】 【詩集】 染色工場!

6 【反響】 花たば。

【文学】 【詩集】 花束。

7 【反響】 夕暮のなかでスマイレ色の瞳が輝き。

【文学】 【詩集】 夕暮の中でスマイレ色の瞳が輝き、

9 【反響】 触れる時夜の壁がくづれるのだ。

【文学】 触れるとき、夜の壁がくづれるのだ。

【詩集】 触れるとき、夜の壁がくづれるのだ。

10 【反響】 それにしても泣く度に

【文学】 【詩集】 それにしても、泣くたびに

↓ ほぼ『文学』版に拠る。「覚書」未記載の『反響』を編者は落とした可能性。 **B群**

[22] 「冬の肖像」『椎の木』一一四（三二〇四）

2 【椎木】 静な

【詩集】 静かな

9 【椎木】 震えてゐる。

【詩集】 震へてゐる。

10 【椎木】 落付かずに

【詩集】 落着かずに

22 【椎木】 彩つてゐたことを、厚く重り

【詩集】 彩つてゐたことを厚く重り

24 【椎木】 思ひ出すだらう。

【詩集】 思ひ出すだらう。

31 【椎木】 知つてゐるのだろうか？

【詩集】 知つてゐるのだろうか？

41 【椎木】 耐えられないやうな

【詩集】 耐えられないやうな

51 【椎木】 振り返ることのない

【詩集】 振り返ることのない

51 【椎木】 浮かんでゐる

【詩集】 浮かんでゐる

↓ほぼ『椎の木』版に拠るが、仮名や漢字の異同も目立つ。 **D群**

〔24〕「白と黒」『マダム・ブランシユ』一（三二〇五）、『文学』四（改題

「睡眠期3」三二二二）

4 【マダム】 止まることを

【文学】【詩集】 止まることを

5 【マダム】 彼等は

【文学】【詩集】 彼らは

6 【マダム】 椅子であつた。／時と焔が

【文学】【詩集】 椅子であつた。時と焔が

8 【マダム】 雨のなかを顔の黒い男がやつて来て、私の心の花壇を

【文学】【詩集】 雨の中を顔の黒い男がやつて来て、／私の心の花壇を

11 【マダム】 踏み荒して行くのか。

【文学】【詩集】 踏み荒してゆくのか。

↓『文学』版に拠りながら、題名は『マダム・ブランシユ』から。 **B群**

〔49〕「五月のリボン」『今日の文学』三一六（三三〇六）

7 【今日】 たゞ

【詩集】 ただ

↓前後の配列順から一九三二年六月初出と編者が誤解した可能性。または三二年五〜六月に編者が把握する別の初出誌が他にある可能性。

**D群**

〔27〕「神秘」『椎の木』一一六（三二〇六）、『文学』四（改題「睡眠期2」

三二二二）、『詩抄』一（「神秘」三三〇三）

【椎木】 題名「神秘」

【文学】 改題「睡眠期2」

【詩抄】 【詩集】 「神秘」

1 【椎木】 【詩抄】 デリシアス

【文学】 デリシアス

【詩集】 デリシアス

1 【椎木】 ころげ落る。

【文学】 【詩抄】 【詩集】 ころがる。

2 【椎木】 避けてゐる如く彼らは旋廻しながら、旋廻しながら、飛び

込む。

【文学】【詩抄】【詩集】 避けてゐる如く、彼らは旋廻しつつ飛び込む。

3 【椎木】 駆け出し、風は群になつて騒ぐ。

【文学】【詩抄】【詩集】 駆け出し、或は風は群になつて騒ぐ。

10 【椎木】【詩抄】 樹木が

【文学】【詩集】 樹木は

12 【椎木】【詩抄】 ほとぼしり出る。

【文学】 ほとぼしりである

【詩集】 ほとぼしりである。

13 【椎木】 ああ、また、男らは

【文学】【詩抄】【詩集】 あ、また男らは

※ 【椎木】 では一行目と最終行の冒頭一字下げ

↓ 『文学』版に抛りながら、題名は『椎の木』から。 **B群**

[26] 「蛋白石」『椎の木』一一六（「蛋白石」三三〇六）、『文学』4（「蛋白石」三三二二）、『詩抄』一（三三〇三）

【椎木】 題名「蛋白石」

【文学】【詩抄】【詩集】 「蛋白石」

7 【椎木】 頬をつたつて、

【文学】【詩抄】【詩集】 頬をながれ

※ 八行目と九行目、【文学】は一行空き。【詩抄】は二行空き。

↓ ほぼ『文学』版に抛る。『詩集』では行空きの処理を『椎の木』版に

改めている。『椎の木』版題名は誤記か。 **B群**

[28] 「夢」『マダム・ブランシユ』二（三二〇七）、『文学』四（改題「睡眠

期4」三二二二）

【マダム】 題名「夢」

【文学】 改題「睡眠期4」

【詩集】 「夢」

1 【マダム】 光のなかでのみ現実には崩壊する。

【文学】【詩集】 光の中でのみ崩壊する現実。

1 【マダム】 すべてのものは鋭く白い。

【文学】【詩集】 すべての骨は白い骨である。

2 【マダム】 背を向けて、彼女は

【文学】【詩集】 背を向けて彼女は

4 【マダム】 【文学】 繰返した。

【詩集】 繰返した。

4 【マダム】 虚飾された時間、

【文学】【詩集】 虚飾された時間。

5 【マダム】 またそれらは家を迂回して

【文学】【詩集】 またそれ等は家を迂回して

7 【マダム】 拒否しながら私は知る。

【文学】【詩集】 拒否しながら、私は知る。

8 【マダム】 巻きあげてゐる。

【文学】【詩集】 まきあげてゐる。

※ 【マダム】 は一行目冒頭一字下げ

↓ ほぼ『文学』版に抛りながら、題名は『マダム・ブランシユ』から。

**B群**

[30] 「白く」『海盤車』一一四（三二〇八）、『文学』四（三二二二）

2 【海盤車】 アミチエストの鈕をきらめかせ

【文学】【詩集】アミシストの釦がきらめき

3 【海盤】降りてくる

【文学】降りて来る

【詩集】降りてくる

7 【海盤】思ひだす

【文学】【詩集】おもひだす。

※【海盤】は句点なし。

↓ほぼ『文学』版に拠る。 **B群**

[32] 【緑】『文芸汎論』二一〇(三二二〇)

4 【文芸】息がたまつていく度も

【詩集】息がたまつていく度も

↓ほぼ『文芸汎論』版に拠る。 **D群**

[35] 【眠つてゐる】『文芸汎論』二一一(三二二二)、『文学』四(改題

「睡眠期1」三二二)、【詩抄】一(「眠つてゐる」三三〇三)

【文芸】題名「眠つてゐる」

【文学】改題「睡眠期1」

【詩抄】【詩集】「眠つてゐる」

1 【文芸】茂みの中を駆け降りる時焔となる。

【文学】茂みの中でさわぐ時火のやうに燃える。

【詩抄】茂みの中でさわぐ時火のやうにもえる。

【詩集】茂みの中を駆け降りる時焔となる。

3 【文芸】彼女は私に不似合な金の環をもつてくる。

【文学】【詩抄】彼女は不似合な金の環をもつてゐる。

【詩集】彼女は不似合な金の環をもつてくる。

5 【文芸】植物らがさうであるやうにそれを全身で

【文学】【詩抄】それらを全身で

【詩集】植物らがさうであるやうにそれを全身で

9 【文芸】【文学】むきだしてゐた、

【詩抄】むきだしてゐた。

【詩集】むきだしてゐた、

11 【文芸】ちよつとの間

【文学】【詩抄】ちよつとの間、

【詩集】ちよつとの間

11 【文芸】花園の枯れる

【文学】【詩抄】【詩集】庭園の枯れる

12 【文芸】思ひ出

【文学】【詩抄】思ひ出

【詩集】思ひ出

14 【文芸】生命たちが真紅に凹地を埋める。

【文学】生命だけが真紅に凹地を充してゐる。

【詩抄】生命だけが真紅に凹地を充してゐる。

【詩集】生命たちが真紅に凹地を埋める。

↓初出の『文芸汎論』版を基本とするが、三行目の独自の異同や一行目の『文学』版が混在。整理稿の可能性。題名は『文芸汎論』から。

**C群d**

[33] 【The mad house】『文芸汎論』二一〇(三二二〇)、『文学』四(改

題「睡眠期5」三二二二)

【文芸汎論】題名「The madhouse」

【文学】改題「睡眠期5」

## 【詩集】「The mad house」

- 1 【文芸】 自転車走つてゐる  
【詩集】 自転車がまはる。
  - 3 【文芸】 護謨輪の内側は地球を廻轉させる  
【文学】 【詩集】 護謨輪の内側のみが地球を疲らせる。
  - 5 【文芸】 そこは非常に賑つてゐる  
【文学】 【詩集】 其處は非常にぎはつてゐる。
  - 6 【文芸】 赤衛軍の兵士等  
【文学】 【詩集】 赤衛軍の兵士ら、
  - 6 【文芸】 リヤザンの女  
【文学】 【詩集】 リヤザン女、
  - 7 【文芸】 螺旋階段 ピアノは  
【文学】 螺旋階段、／ピアノは  
【詩集】 螺旋階段。／ピアノは
  - 9 【文芸】 立つてゐる人々は尖つた水晶體だ／踏みはずすと死ぬだらう  
【文学】 【詩集】 たつてゐる人々は尖つた水晶體であらう。踏みはずすと死ぬ。
  - 10 【文芸】 太陽の無限の傳播作用 病原地では植物が渴き 荒廢した  
街路を雲がかけてゐる  
【文学】 【詩集】 太陽の無限の傳播作用。／病原地では植物が渴き、  
荒廢した街路をかけてゐる雲。
  - 17 【文芸】 私は生きてゐる 私は生きてゐる  
【文学】 【詩集】 私は生きてゐる。私は生きてゐると思つた。
- ※ 【文芸】 には句読点なし。
- ↓ ほぼ『文学』版に拠る。前後の配列順から編者は『文芸汎論』を落としたか。 **B群**

【34】「雲のかたち」『マダム・ブランシュ』三(三二二一)、『文学』四(三三二二)、『詩抄』一(三三〇三)

- 1 【マダム】 高い波の銀色の門をおしあけて  
【文学】 【詩抄】 【詩集】 銀色の波のドアチをおしあけて
  - 6 【マダム】 集められ そして引き裂かれる  
【文学】 集められそして引き裂かれる。  
【詩抄】 集められ／そして引き裂かれる。  
【詩集】 集められそして引き裂かれる。
  - 9 【マダム】 毎日 葉のやうな細い指先が  
【文学】 毎日、葉のやうな細い指先が  
【詩抄】 毎日、葉のやうな細い指先が  
【詩集】 毎日、葉のやうな細い指先が
- ※ 【マダム】 は句点なし。
- ↓ 『文学』版に拠る。前後の配列順から編者は『マダム・ブランシュ』を落としたか。 **B群**

【25】「風」『海盤車』一—三(三二〇六)、『文学』四(三二二二)

- 1 【海盤】 古びた蓄音機  
【文学】 【詩集】 こはれた蓄音機
  - 4 【海盤】 白く乾き、彼らは  
【文学】 【詩集】 白く乾き／彼らは
  - 6 【海盤】 燕尾服をきて、森が後からついてゆく。／ステッキが動く。  
閃くナイフ。  
【文学】 【詩集】 (削除)
- ↓ 『文学』版に拠る。前後の配列順から編者は『海盤車』を落としたか。 **B群**

[36] 「雪の日」 『文芸汎論』 二二―二二 (三二二二)

※ 【文芸】 【詩集】 に異同なし。

↓ 『文芸汎論』 版に拠る。 **D群**

[37] 「鐘のなる日」 『海盤車』 一―一六 (三二二二)、 『マダム・ブランシユ』

四 (改題「冬の詩」三三〇一)

【海盤】 題名「鐘のなる日」

【マダム】 改題「冬の詩」

【詩集】 「鐘のなる日」

2 【海盤】 ふみにじられる

【マダム】 ふみにぢられる

【詩集】 ふみにじられる

5 【海盤】 かねの音が

【マダム】 鐘の音が

【詩集】 かねの音が

8 【海盤】 無いのだから

【マダム】 無いのだから

【詩集】 無いのだから

↓ 初出の『海盤車』版に拠る。編者は『マダム・ブランシユ』を落と  
したか。 **A群d**

【一九三三年初出詩】

[39] 「憑かれた街」 『椎の木』 二―二 (三三〇一)、 『詩法』 一 (憑かれた街  
三四〇八)

【椎木】 題名「憑かれた街」

【詩法】 「憑かれた街」

【詩集】 「憑かれた街」

1 【椎木】 思ひ出の壮大な建物を

【詩法】 過去の壮大な建物を

【詩集】 思ひ出の壮大な建物を

2 【椎木】 ほろびたものの上に／喚び起こし、

【詩法】 滅びたものうへに／喚び起し

【詩集】 ほろびたものの上に／喚び起こし、

3 【椎木】 待ちまうけ、

【詩法】 待ちまうけ

【詩集】 待ちまうけ、

4 【椎木】 空しく

【詩法】 むなしく

【詩集】 空しく

6 【椎木】 すべての彼らの悲しみは／けつして語られる

【詩法】 彼らの悲しみはけつして／語られる

【詩集】 すべての彼らの悲しみは／けつして語られる

8 【椎木】 地上は花の咲いたリノリウムである。

【詩法】 地上の花の咲いたリノリウムは

【詩集】 地上は花の咲いたリノリウムである。

11 【椎木】 よろめき／彼等は

【詩法】 跟き／彼等は

【詩集】 よろめき／彼等は

16 【椎木】 しめつた

【詩法】 湿つた

【詩集】 しめつた

※ 【詩法】 には句読点なし。

↓初出の『椎の木』版に拠る。編者は「覚書」未記載の『詩法』を落とした。**A群d**

[40]「波」『椎の木』二一一(三三〇一)

7【椎木】つたはつてゆく

【詩集】つたはつてゆく。

↓ほぼ『椎の木』版に拠る。**D群**

[41]「雲のやうに」『椎の木』二一一(三三〇一)、『行動』一一三(三三二二)

2【椎木】葉裏をはひ／たえず繁殖してゐる。

【行動】葉裏をはひ たへず繁殖してゐる

【詩集】葉裏をはひ／たえず繁殖してゐる。

5【椎木】それは青い霧がふつてゐるやうに思はれる。

【行動】それは青い霧である

【詩集】それは青い霧がふつてゐるやうに思はれる。

8【椎木】婦人らはいつもただれた目付で

【行動】婦人達はただれた目付きで

【詩集】婦人らはいつもただれた目付で

9【椎木】拾つてゆく。

【行動】拾つてゐる

【詩集】拾つてゆく。

12【椎木】そして私は見る。

【行動】それから私は見る

【詩集】そして私は見る、

13【椎木】まん中から

【行動】まん中から

【詩集】まん中から

※【行動】は句読点なし。

↓初出の『椎の木』版にほぼ拠る。編者は「覚書」未記載の『行動』を落とした。**A群d**

[42]「毎年土をかぶらせてね」『今日の文学』三一(冬の詩)三三〇一

【今日】題名「冬の詩」

【詩集】「毎年土をかぶらせてね」

※【今日】【詩集】に異同なし。

↓『今日の文学』版に拠る。改題名は他に未発見の雑誌がなければ、整理稿に拠る可能性。**C群s**

[43]「目覚めるために」『マダム・ブランシユ』五(三三〇二)

※【マダム】【詩集】に異同なし。

↓『マダム・ブランシユ』版に拠る。**D群**

[44]「花咲ける大空に」『マダム・ブランシユ』六(三三〇四)、『詩法』

一(三四〇八)

3【マダム】それ等を入れよう。

【詩法】それらを入れよう

【詩集】それ等を入れよう。

5【マダム】ばら色の小鳥が私の頭を

【詩法】バラ色の小鳥が私の頭を

【詩集】ばら色の小鳥が私の頭を

※【詩法】には句点なし。

↓初出の『マダム・ブランシユ』版に拠る。編者は「覚書」未記載の

『詩法』を落とした。**A群d**

[45]「雪の門」『海盤車』二一八（「雪の門」三三〇四）、『行動』一一三（改題「雲の門」三三二二）

【海盤】 題名「雪の門」

【行動】 「雲の門」

【詩集】 「雪の門」

3 【行動】 青ざめて

【詩集】 あをざめて。

6 【行動】 としとつた雪のひとかたまりであつた

【詩集】 年とつた雪の一群であつた。

※ 【海盤】 本文未見。

※ 【行動】 に句読点なし。

↓ 編者は「覚書」未記載の『行動』を落とす。『行動』の題名は誤記。

『《行動》掲載原稿では表題「雪の門」』（『左川ちか全詩集』森開社、二〇八頁、原稿未見）**未**

[46]「単純なる風景」『椎の木』二一五（三三〇五）、『詩法』一（改題「POEM」三四〇八）

【椎木】 題名「単純なる風景」

【詩法】 改題「POEM」

【詩集】 「単純なる風景」

1 【椎木】 酔ひどれびとのやうに／揺れ動く雲の建物。

【詩法】 （削除）

【詩集】 酔ひどれびとのやうに／揺れ動く雲の建物。

8 【椎木】 或ものは風のやうに

【詩法】 或は風のやうに

【詩集】 或ものは風のやうに

14 【椎木】 人人は

【詩法】 人々は

【詩集】 人人は

18 【椎木】 恰も詩人が

【詩法】 詩人が

【詩集】 恰も詩人が

※ 【詩法】 は句読点なし。

↓ 初出の『椎の木』版に拠る。編者は「覚書」未記載の『詩法』を落とす。**A群d**

[47]「春」『椎の木』二一五（三三〇五）、『マダム・ブランシュ』七（三三〇六）、『詩法』一（三四〇八）

2 【椎木】 【マダム】 紫の煙

【詩法】 春の煙

【詩集】 紫の煙

3 【椎木】 充す。

【マダム】 【詩法】 充す

【詩集】 充たす。

4 【椎木】 まもなくここへ来るだらう。

【マダム】 まもなくここへ来るだらう

【詩法】 まもなく来るだらう

【詩集】 まもなくここへ来るだらう。

※ 【マダム】と【詩法】は句点なし。

↓ 初出の『椎の木』版にほほ拠る。編者は「覚書」未記載の『詩法』

を落とす。 **A群d**

[48] 「舞踏場」 『貝殻』 二―二 (三三〇五)

※ 『貝殻』 『詩集』 に異同なし。

↓ 『貝殻』 版に拠る。 **D群**

[51] 「暗い夏」 『作家』 一 (三三〇七)

34 【作家】 木の葉を万載して。

【詩集】 木の葉を満載して。

45 【作家】 窓邊に残こされた

【詩集】 窓邊に残された

53 【作家】 そうすれば私はもつと

【詩集】 さうすれば私はもつと

70 【作家】 海をあほさと草の匂

【詩集】 海をあをさと草の匂

80 【作家】 素足が宙に浮いて少年は遂に

【詩集】 素足が宙に浮いて。少年は遂に

↓ ほぼ『作家』版に拠る。句点・仮名などが改められている。 **D群**

[52] 「星宿」 『椎の木』 二―八 (三三〇八)、 『女人詩』 一一 (三三〇八)、

『詩法』 一 (三四〇八)

4 【椎木】 『女人』 壁のうへを歩いてゐる

【詩法】 壁に沿つて歩いてゐる

【詩集】 壁のうへを歩いてゐる

5 【椎木】 『女人』 夜の暗い空気

【詩法】 暗い空気

【詩集】 夜の暗い空気

6 【椎木】 『女人』 あだかも睡眠と死の境で踊つてゐた時のやうに

【詩法】 あたかも睡眠と死の境の一本の地平線のやうに

【詩集】 あだかも睡眠と死の境で踊つてゐた時のやうに

7 【椎木】 『女人』 生命の影なのだ

【詩法】 生命の影である

【詩集】 生命の影なのだ

8 【椎木】 『女人』 その草の下で

【詩法】 その草の下で

【詩集】 その草の下で

8 【椎木】 開く

【女人】 開いた

【詩法】 開く

【詩集】 開いた

10 【椎木】 それは石境に

【女人】 それらは石塊に

【詩法】 それらは石塊に

【詩集】 それらは石塊に

↓ 再掲誌『女人詩』版に拠る。編者は「覚書」未記載の『詩法』（再々掲誌）を落とす。 **A群t**

[50] 「むかしの花」 『新人早稲田』 一―四 (三三〇六)、 『椎の木』 二―九

(三三〇九)

※ 『早稲田』 未見。

※ 『椎木』 『詩集』 に異同なし。

↓ 編者は「覚書」未記載の『新人早稲田』を落とす。 **未**

[53] 「他の一つのもの」『椎の木』二一八(三三〇八)、『呼鈴』一二(三三二〇)、『行動』一一三(三三二二)

2 【椎木】 【呼鈴】 飛びこむ

【行動】 飛び込む

【詩集】 飛びこむ

4 【椎木】 窓を流れた

【呼鈴】 窓を流れる

【行動】 窓を流れた

【詩集】 窓を流れる

5 【椎木】 その向ふ側から／私は夏が進行して来るのを見てゐる

【呼鈴】 その向ふ側で／ゼンマイのほぐれる音がする

【行動】 その向ふ側で／ゼンマイをまく音がする

【詩集】 その向ふ側で／ゼンマイのほぐれる音がする

↓再掲誌『呼鈴』版に拠る。編者は「覚書」未記載の『行動』(再々掲誌)を落とす。『左川ちか全詩集』(森開社)に『呼鈴』原稿写真掲載(小樽文学館蔵)

**A群t**

[54] 【背部】 『海盤車』二一一(三三二〇)、『測量船』二(三三二二)

1 【海盤】 食ひ

【測量】 食らひ

【詩集】 食ひ

2 【海盤】 まがひもの

【測量】 まがひもの、

【詩集】 まがひもの

5 【海盤】 【測量】 育くまれる

【詩集】 育まれる

6 【海盤】 【測量】 蹠き

【詩集】 蹠き

※五行目と六行目、【測量】のみ二行空き。

↓初出の『海盤車』版にほぼ拠る。編者は「覚書」未記載の『測量船』を落とす。「蹠<sup>もが</sup>き」は編者の判断か整理稿か。「蹠<sup>ひぞまつ</sup>き」は誤記か。**A群d**

[55] 【葡萄酒の汚点】 『椎の木』二一一(三三二二)

2 【椎木】 残して、

【詩集】 残こして、

3 【椎木】 かつて

【詩集】 かつて

8 【椎木】 旋回する

【詩集】 旋廻する

↓ほぼ『椎の木』版に拠る。「かつて」は誤記。**D群**

[56] 【雪線】 『文芸汎論』三一―二(三三二二)

2 【文芸】 とびこゑ

【詩集】 とびこゑ

3 【文芸】 テクニツク

【詩集】 テクニツク

↓ほぼ『文芸汎論』版に拠る。**D群**

【一九三四年初出詩】

[57] 【プロムナード】 『鬪鷄』三(三四〇二)

※【鬪鷄と】 【詩集】 に異同なし。

↓『鬪鷄』版に拠る。**D群**

〔60〕「会話」『マダム・ブランシユ』一四（三四〇三）、『苑』二（三四〇四）

- 1 【マダム】下積になつてゐた  
 【苑】下積になつてゐる  
 【詩集】下積になつてゐた
- 2 【マダム】あげられるだらう。  
 【苑】あげられるのだらう。  
 【詩集】あげられるだらう。
- 2 【マダム】這ひ出して来る  
 【苑】這ひだして来る  
 【詩集】這ひ出して来る
- 4 【マダム】ほこりだらけな指で  
 【苑】ほこりだらけの指で  
 【詩集】ほこりだらけな指で
- 6 【マダム】夢は夢見る者  
 【苑】夢は夢を見る者  
 【詩集】夢は夢見る者
- 8 【マダム】また、マドリガルの  
 【苑】またマドリガルの  
 【詩集】また、マドリガルの
- 9 【マダム】大きな歡喜の  
 【苑】大いなる歡喜の  
 【詩集】大きな歡喜の
- 10 【マダム】歩調のながれ。  
 【苑】歩調の流れ。  
 【詩集】歩調のながれ。
- 11 【マダム】墓石の下ですでに

- 【苑】墓石の下で、すでに  
 【詩集】墓石の下ですでに
- 12 【マダム】限らない色彩が  
 【苑】華麗な不在者が  
 【詩集】限らない色彩が
- 15 【マダム】【苑】不滅の深淵をころがりながら、幾度も  
 【詩集】不滅の深淵をころがりながら幾度も
- 15 【マダム】目覺めるものに関聲となり、その音が  
 【苑】目覺める者に関聲をつくりその音が  
 【詩集】目覺めるものに関聲となり、その音が
- 17 【マダム】射る。この天の  
 【苑】射る。／この天の  
 【詩集】射る。この天の
- ※【苑】【詩集】は各連の冒頭一字分下げ  
 ↓初出の『マダム・ブランシユ』版にほぼ拠る。編者は「覚書」未記  
 載の『苑』を落とす。A群d
- 〔58〕「遅いあつまり」『貝殻』三一（三四〇三）、『苑』二（三四〇四）
- 1 【貝殻】やつて来る。  
 【苑】やつて来る、  
 【詩集】やつて来る。
- 1 【貝殻】無いやうに。  
 【苑】無いやうに。  
 【詩集】無いやうに。
- 3 【貝殻】花びらが  
 【苑】花辨が

【詩集】花びらが

↓初出の『貝殻』版に拠る。編者は「覚書」未記載の『苑』を落とす。

**A群d**

[59] 「天に昇る」『カイエ』六(三四〇三)、『ごろつちよ』一(三四〇六)

4 【カイエ】 ふみにぢられ

【ごろ】 ふみにじられ

【詩集】 ふみにぢられ

6 【カイエ】 据えた

【ごろ】 据えた

【詩集】 据えた

10 【カイエ】 月光は／全く

【ごろ】 月光は全く

【詩集】 月光は／全く

↓初出の『カイエ』版に拠る。編者は「覚書」未記載の『ごろつちよ』を落とす。**A群d**

[61] 「メーフラワー」『カイエ』七(三四〇五)、『小劇場』三一七(三四〇六)

2 【カイエ】 動き出す

【劇場】 動き出す

【詩集】 動き出す

↓初出の『カイエ』版に拠る。編者は「覚書」未記載の『小劇場』を落とす。**A群d**

[63] 「暗い歌」『日本詩壇』二一五(暗い唄)三四〇七)

【日本】 題名「暗い唄」

【詩集】 「暗い歌」

1 【日本】 カアペットの上を、

【詩集】 新しいカアペットの上を

2 【日本】 押してゆく。

【詩集】 押して行く

3 【日本】 静かにゆつくりと

【詩集】 静かに ゆつくりと

4 【日本】 燃えてゐる道で、

【詩集】 燃えてゐる道で

5 【日本】 染り。

【詩集】 染まり

6 【日本】 ふれるところは

【詩集】 ふれる處は

↓編者は「覚書」未記載の『日本詩壇』を落とす。独自の改稿と「暗い歌」への改題は整理稿に拠るか。『近代詩人・歌人自筆原稿集』(東京堂出版、二〇〇二)に『日本詩壇』原稿写真掲載。**C群s**

[62] 「果実の午後」『椎の木』三一六(三四〇六)、『日本詩壇』二一五(改題「おなじく」三四〇七)

【椎木】 題名「果実の午後」

【日本】 改題「おなじく」

【詩集】 「果実の午後」

2 【椎木】 必要としない、たとへ

【日本】 必要としない。たとへ

【詩集】 必要としない たとへ

3 【椎木】 象牙の Key を

【日本】象牙のキイを

【詩集】象牙の鍵キを

5 【椎木】芝生に。

【日本】芝生に、

【詩集】芝生に、

6 【椎木】ころがつてゐる。

【日本】ころがつてゆく。

【詩集】ころがつてゐる。

↓ 編者は「覚書」未記載の『日本詩壇』を落とす。独自の異同及び題名を「果実の午後」に戻したのは整理稿に拠るか。【C群d】

[64] 【花】『カイエ』八(三四〇七)

※【詩集】は【カイエ】版の全三章のうち、第一章部分のみ収載。

↓ 第一章のみ収載。編者の判断なら意図が不明。ミスでなければ整理稿に拠るか。【C群s】

[65] 【午後】掲載誌不明

↓ 「覚書」記載の『書帷』（内田忠、福井県丸岡）三四年七月〜九月号頃の可能性。『書帷』未見。【未】

[67] 【海泡石】『椎の木』三一九(三四〇九)

2 【椎木】海上は吹雪だ

【詩集】海上は吹雪だ。

※【椎木】は各連の冒頭一字分下げ  
↓ ほぼ『椎の木』版に拠る。【D群】

[66] 「夏のをはり」『女人詩』一四(三四〇八)、『レスプリ・ヌウボオ』

一(三四一一)

2 【女人】這つてゐる

【レス】【詩集】這つてゐる

3 【女人】【レス】テンポが

【詩集】テムポが

10 【女人】凍った港からやって来るだらう

【レス】【詩集】凍った港からやって来るだらう

↓ ほぼ『レスプリ・ヌウボオ』版に拠る。関連詩「季節」『モダン日本』五一―一(三四一一)【B群】

[70] 【Fragile】『椎の木』三一〇(三四一〇)

2 【椎木】つきあたたつて いつまでも

【詩集】つきあたたつて／いつまでも  
↓ ほぼ『椎の木』版に拠る。【D群】

[72] 【素朴な月夜】『椎の木』三一―一(三四一一)

※【椎木】【詩集】異同はなし。  
↓ 『椎の木』版に拠る。【D群】

[71] 【前奏曲】『カイエ』九(三四一一)

8 【カイエ】ほんとうに

【詩集】ほんたうに

12 【カイエ】若若しい  
【詩集】若々しい

15 【カイエ】チヨコレイト

- 【詩集】 チョコレト  
 15 【カイエ】 気候のよいことや  
 【詩集】 気候のよいことや、  
 17 【カイエ】 旋廻し、  
 【詩集】 旋廻し、  
 22 【カイエ】 足音も  
 【詩集】 足音も  
 33 【カイエ】 毒々しさ  
 【詩集】 毒々しさ  
 38 【カイエ】 雨漏りのあととついた  
 【詩集】 雨漏りのあとのついた  
 43 【カイエ】 諦めきれずに、  
 【詩集】 諦めきれずに、  
 45 【カイエ】 捕ふてみたい  
 【詩集】 捕へてみたい  
 58 【カイエ】 ヴェール  
 【詩集】 ヴェール  
 89 【カイエ】 眼つてゐるうちに、  
 【詩集】 眠つてゐるうちに、  
 91 【カイエ】 穏してゐるからだ、  
 【詩集】 隠してゐるからだ、  
 96 【カイエ】 憑れて  
 【詩集】 憑かれて  
 103 【カイエ】 柵を破壊して  
 【詩集】 柵を破壊して  
 108 【カイエ】 組立てることばかりを

昭森社『左川ちか詩集』（一九三六）の書誌的考察

- 【詩集】 組立てることばかり  
 115 【カイエ】 咲こうとする。  
 【詩集】 咲かうとする。  
 130 【カイエ】 こうしてゐるうちに私は一本の樹に比して樹立ちの  
 【詩集】 かうしてゐるうちに私は一本の樹に化して樹立ちの  
 160 【カイエ】 ヴェランダ  
 【詩集】 ヴェランダ  
 167 【カイエ】 段々  
 【詩集】 段々  
 168 【カイエ】 さまよう  
 【詩集】 さまよふ  
 169 【カイエ】 調べであらうとは、  
 【詩集】 調べであらうとは。  
 ※【詩集】 は五段落と六段落の間一行空き。  
 ↓ほぼ『カイエ』版に拠る。仮名や誤字を改める。 **D群**  
 【参考】「季節」『モダン日本』五一一（「季節」三四二）（「夏のをはり」の改題作）  
 3 【モダン】 テンポ  
 【詩集】 テムポ  
 8 【モダン】 たべてゆく  
 【詩集】 たべて行く  
 11 【モダン】 しかもすべての人の一日が終らうとしてゐる  
 【詩集】 しかもすべてこの心の一日が終らうとしてゐる  
 ※【モダン】 は漢字に全てふりがな。  
 ※【詩集】 は四行目と五行目、六行目と七行目、九行目と一〇行目の間

一行空き。

↓ほぼ『モダン』版に拠る。「この心の一日」は誤字か。「夏のをはり」と「季節」併載について『詩集』『覚書』に説明なし。関連詩「66」「夏のをはり」「女人詩」一四（三四〇八）。本稿「左川ちかの詩篇一覧」では、「夏のをはり」と同系統のヴァリアントと判断し、独立した作品番号は付していない。D群

[73]「言葉」『椎の木』三一―二（三四―二）

※【椎木】【詩集】異同はなし。

↓『椎の木』版に拠る。D群

[75]「落魄」『海盤車』三一―一六（三四―二）

8【海盤】絡みつけ、いはれた

【詩集】絡みつけ いはれた

↓ほぼ『海盤車』版に拠る。D群

【一九三五年初出詩】

[77]「三原色の作文」『海盤車』四―一七（三五〇―二）

28【海盤】愛するやうに

【詩集】愛するやうに

38【海盤】田地ヲモツテキタ、

【詩集】田地ヲモツテキタ。

44【海盤】侵す寒さが汽車の時間に

【詩集】侵す寒さが。汽車の時間に

↓ほぼ『海盤車』版に拠る。D群

[81]「海の花嫁」『セルパン』五一―（三五〇―六）

14【セルパン】おいしうございます。

【詩集】おいしうございます

※四行目【セルパン】「けふかへろ、けふかえろ、」は二字分下げ。

↓ほぼ『セルパン』版に拠る。D群

[78]「太陽の唄」『るねっさんす』二―（三五〇―三）、『詩法』一一―（太陽の娘）三五〇―八）

【るね】題名「太陽の唄」

【詩法】「太陽の娘」

2【るね】【詩法】渦巻きながら

【詩集】渦巻きながら

3【るね】闇に踞く

【詩法】ひざまづく

【詩集】闇に踞く

4【るね】獣ものどもが

【詩法】【詩集】獣どもが

7【るね】併し古い楽器は

【詩法】古い楽器は

【詩集】併し古い楽器は

9【るね】カーヴする

【詩法】カーヴする

【詩集】カーヴする

11【るね】そしてヴェルは

【詩法】ヴェルは

【詩集】そしてヴェルは

13 【るね】 聲のない季節がいつこの岸で

【詩法】 聲のない季節は／どちらの岸で

【詩集】 聲のない季節がいつこの岸で

14 【るね】 青春と光榮に輝くのだらう

【詩法】 青春と光榮に輝くのか

【詩集】 青春と光榮に輝くのだらう

↓ 初出の『るねさつんす』版にほぼ拠る。編者は「覚書」未記載の『詩法』を落とす。 **A群d**

〔85〕「山脈」『短歌研究』四一八（三五〇八）

※【短歌】【詩集】異同はなし。

↓『短歌研究』版に拠る。 **D群**

〔86〕「海の天使」『短歌研究』四一八（三五〇八）

4 【短歌】 帰へりを待つ

【詩集】 帰りを待つ

6 【短歌】 私は大聲をだし 訴へようとし

【詩集】 私は大聲をだし 訴へようとし

↓ ほぼ『短歌研究』版に拠る。関連詩〔83〕「海の捨子」『詩法』一二（三五〇八） **D群**

〔82〕「夏のこゑ」『芸術科』三一七（山に話してゐる）三五〇七、『椎の木』五二三（改題「夏のこゑ」三六〇三）

【芸術】 題名「山に話してゐる」

【椎木】 改題「夏のこゑ」

【詩集】 「夏のこゑ」

2 【芸術】 ラシヤのマントに

【椎木】 【詩集】 羅紗のマントに

7 【芸術】 見てゐる。

【椎木】 【詩集】 向いてゐる

9 【芸術】 動き出してきた。

【椎木】 【詩集】 動きだしてきた

11 【芸術】 騒ぎあつてゐる。

【椎木】 【詩集】 騒ぎ合つてゐる

12 【芸術】 うづくまつて

【椎木】 【詩集】 蹲つて

13 【芸術】 うわさを

【椎木】 【詩集】 噂を

14 【芸術】 花粉のやうな水が流れるだらう。

【椎木】 【詩集】 花粉のやうに水が流れるのだ

※七行目と八行目の間【芸術】【詩集】は一行空き。【椎木】は二行空き。

※【芸術】のみ句読点あり。

↓ ほぼ『椎の木』版に拠る。編者は「覚書」未記載の『芸術科』を落とす。 **B群**

### 【卷末詩】

〔88〕「季節の夜」『椎の木』五二三（三六〇三）

※【椎木】【詩集】異同はなし。

↓『椎の木』版に拠る。 **D群**

〔31〕「The street fair」『椎の木』一一一〇（三二一〇）、『行動』一一三

(三三二二)

- 2 【椎木】 白く馬が這ひあえぎまはつてゐる如く。  
 【行動】 白い馬が喘ぎまはつてゐる如く  
 【詩集】 白く馬があへぎまはつてゐる如く
- 4 【椎木】 (二字空白) を殺害するためにやつて来る。  
 【行動】 【詩集】 時を殺害するためにやつて来る
- 6 【椎木】 並んでゐた。  
 【行動】 【詩集】 並んでゐた
- 8 【椎木】 眠から更に深い眠へと落ちてゆく。  
 【行動】 【詩集】 眠りから更に深い眠りへと落ちてゆく
- 10 【椎木】 絶望のやうに／＼高く空を支へてゐる  
 【行動】 絶望のやうに高い空を支へてゐる。  
 【詩集】 絶望のやうに／＼高い空を支へてゐる
- 12 【椎木】 道もなく星もない空虚な街  
 【行動】 道もなく星もない／＼花も咲かない空虚な街。  
 【詩集】 道もなく星もない空虚な街
- 14 【椎木】 抜けだし  
 【行動】 ぬけ出し  
 【詩集】 抜けだし
- 15 【椎木】 ピストンのかゞやきと  
 【行動】 ピストンの輝きや  
 【詩集】 ピストンのかがやきや
- 16 【椎木】 奪ひ去り

- 【行動】 うばひ去り  
 【詩集】 奪ひ去り
- 18 【椎木】 うちのめされる  
 【行動】 打ちのめされる。  
 【詩集】 打ちのめされる  
 ※ 【詩集】 には句点なし。
- ↓「覚書」に「制作若しくは発表の時を明らかにしない」。編者は『椎の木』『行動』を落とす。『詩集』収録詩には『椎の木』版と『行動』版が混在。さらに独自の異同部分があり、整理稿に拠ったか。『詩集』後、『目』[AUGEN]』二号(三六・一二)に再掲。[C群d]
- [69] [1.2.3.4.5] 掲載誌不明。[68] 「指間の花」『呼鈴』二〇(三四〇九)の第二章部分抜粋か。  
 【呼鈴】 題名「指間の花」  
 【詩集】 [1.2.3.4.5]
- 1 【呼鈴】 並木の下で少女は緑色の手を舉げて誰かを呼んでゐる。植物のやうな皮膚を驚いて見てゐると、やがて絹の手袋をぬいだ。  
 【詩集】 並木の下で少女は緑色の手を舉げてゐる。／＼植物のやうな皮膚におどろいて、見るとやがて絹の／＼手袋を脱ぐ。  
 ↓「覚書」に「制作若しくは発表の時を明らかにしない」。編者は『呼鈴』を落とす。本詩は『呼鈴』版を独自に改稿しており、整理稿に拠るか。『左川ちか全詩集』旧版(森開社)に『呼鈴』原稿写真部分掲載。『詩集』後、『目』[AUGEN]』二号(三六・一二)に再掲。[C群s]